

熱帯オーストラリアの鉱山業フロンティア と遠隔地集落

川崎 茂

まえがき

本稿は熱帯オーストラリア (Tropical Australia) の鉱山業フロンティア (mining frontier) について、とくに遠隔地集落 (remote settlement) の形成という視点から概括的に展望した1つの覚書である。さきに筆者はフロンティアの一類型としての鉱山業フロンティアについて概括的な展望を試み¹⁾、さらに19世紀後半におけるオーストラリアの鉱山業フロンティアについて、とくに Broken Hill などを事例に若干の検討を加えた²⁾。本稿は文字通りそれらの続編である。

ところでオーストラリアの奥地 (Outback) にみる内陸フロンティア (inland frontier) を問題にする場合、スピニフェックス・カントリー (spinifex country)、部族テリトリー (tribe territory)、白いオーストラリア (White Australia)、遠隔地集落、孤立性 (isolation)、遠隔性 (remoteness)、仲間意識 (mateship)、楽天主義 (optimism) などろもろのキーワードが想起されるであろう。本稿ではとくに遠隔地集落をキーワードの核として、熱帯オーストラリア内陸の鉱山業フロンティアについて概観することを試みた。

なお筆者は、1988年8月に第26回国際地理学会議 (I.G.C.) のプレ・コングレス巡検 (A6) で、Mount Isa, Cloncurry, Tennant Creekなどを訪れ、遠隔地集落の地域イメージを若干得ることができた。すでに筆者は1974年に Kalgoorlie³⁾や Broken Hill を踏査した経験があり、その折以来 Mount Isa を訪れることが1つの念願であった。しかし本稿はその巡検報告ではなく、あくまでも筆者が意図する鉱山業フロンティアの歴史地理的研究の一環をなすものとして記述した概括的な覚書である。

I 太平洋フロンティアと内陸フロンティア

オーストラリアのフロンティアは、まず太平洋フロンティア (Pacific

frontier⁵⁾を嚆矢とした。周知のように、イギリスは1788年以降オーストラリア南東岸のSydney Coveを拠点に、ニューサウスウェールズ(N.S.W.)の植民地経営に乗り出した。しかし、1830年代ころまでのオーストラリアのフロンティアは、東海岸西方の大陸奥地よりむしろ東方の太平洋近隣島嶼域において目立った展開を示した。

ヨーロッパ人はタヒチの豚交易に始まり、鯨、アザラシ、白檀(sandalwood)、カウリ帆柱材(kauri spar)、亜麻(flax)などを求めて、ニュージーランド、フィジー方面などに進出し、シドニーなどはそれらの重要な交易拠点をなしていた。ちなみに1835年ころまでは、オーストラリアで最も重要な輸出産業は羊毛業でなく捕鯨業で、シドニーやタスマニア(Van Diemen's Land)のホバートは、捕鯨基地として脚光を浴びた。

このようにオーストラリアのフロンティアは、北アメリカのフロンティアと対比した場合、西漸運動で象徴される内陸フロンティアだけでなく、東方の太平洋フロンティアによって特色づけられた。流刑植民地として出発したN.S.W.では、刑期を終えた人たちにとっても、いわゆるbushmanとして内陸奥地に入るか、また太平洋近隣島嶼域に乗り出すbeachcomberになるか2つの道があった。流刑囚や刑期を終えた人たちが、太平洋近隣島嶼域のbeachcomber人口の大部を構成し、ニュージーランド、タヒチ、フィジー、サモアなどにはオーストラリアゆかりのヨーロッパ人の小さなコミュニティが形成された。

ところで1830年代ころから捕鯨業の衰退に並行して太平洋フロンティアの重要性が相対的に低下してきた。それに代わって羊毛業を主役とした内陸フロンティアが台頭し、内陸に向かって羊の群を追うスコッター(squatter)の動きが目立ってきた。さらに1836年にはサウスオーストラリア(S.A.)のコロニーが発足し、計画的な植民地経営が進められた。S.A.ではまず羊毛業者のフロンティア(squatter's frontier)が先行し、それに鉱山業者のフロンティア(miner's frontier)、農民のフロンティア(farmer's frontier)が続く図式を示したが、とくに1840年代の銅鉱業は、オーストラリア最初の本格的な鉱山業フロンティアとして注目された⁶⁾。さらに1850年代のビクトリア(Vic.)のゴールド・ラッシュによって、鉱山業フロンティアが爆発的な展開を示し、これらによる急激な人口増加が農業フロンティアをも刺激する結果となった。

さて1861年にはニュージーランド南島のオタゴでゴールド・ラッシュが始まり⁷⁾、再び東方の太平洋近隣島嶼域がクローズアップされてきた。また1860年代には、1859年にN.S.W.から独立したクインズランド(Qld)で新しい動きがみられた。とくにQldの東海岸で甘蔗のプランテーションが台頭し、メラネシア

方面の太平洋島嶼民 (Pacific Islanders), いわゆるカナカ人 (Kanakas) が甘蔗農園の労働者として多数移入された。⁸⁾ さらにアメリカの南北戦争で綿花価格が高騰し, Qld でも綿花栽培がみられたが, とくにフィジーでは綿花のプランテーションが脚光を浴び, 1871年にはシドニーやメルボルン, オークランドなどからフィジーに向けて, いわゆる 'great Fiji rush' が展開された。⁹⁾

ともあれ19世紀のオーストラリアにおいて, 未開と文明の接触するフロンティアといえば, それが太平洋近隣島嶼域であれ, また大陸内陸部であれ, 捕鯨業, 牧畜業, 鉱山業, 農業などのフロンティアがまず想起されるであろう。なかでも白人占拠を通して最もドラマチックな展開をみせたのは鉱山業フロンティアであった。

II 熱帯オーストラリアのゴールド・ラッシュ

前述のように, オーストラリアの鉱山業フロンティアは1850年代の Vic. の爆発的なゴールド・ラッシュによって一躍脚光を浴びた。1860年代には Vic. からタスマン海を越えてニュージーランド南島にゴールド・ラッシュが飛び火し, オーストラリアの太平洋フロンティアの典型的な様相を示すものとして注目された。一方, Vic. から遠く離れた大陸北部の熱帯オーストラリアにおいても, 1860年代から1880年代にかけて金の発見が相次いでみられた。¹⁰⁾ 熱帯オーストラリアは一応南回帰線以北の地域を指すが, それは Qld 北部からノーザンテリトリー (N.T.), ウェスタンオーストラリア (W.A.) 北部に及んだ。

まず Qld 北部では, 例えば1860年代にはタウンズビルの西方約80kmの Star River などにおいて, さらに1870年代に入るとカーペンタリア湾に注ぐミッチェル川支流の Palmer River など各地で金が相次いで発見された。とくに1872年の金発見に始まる Palmer River へのラッシュは, Qld ゴールド・ラッシュのピークを形成し, 熱帯オーストラリア最初の本格的なゴールド・ラッシュとして注目された。¹¹⁾ ケアンズ北方の Cooktown は, 探検家 James Cook ゆかりの地で知られ, 1981年現在人口913ばかりの小さな観光リゾート基地をなすが, 1870年代に Palmer River 上流域のゴールド・ラッシュの門戸として開設された。1875年に入り, 華南から多くの中国人が Cooktown に上陸し始め, 1877年までに1万7,000を数える中国人が Palmer River 産金地に殺到した。この中国人の数は1876年における Qld 北部のヨーロッパ人全体の数に匹敵したといわれるが, 今日では Maytown などのゴースト・タウンがゴールド・ラッシュ時代の面影を伝えるに過ぎない。¹²⁾

なおタウンズビルやケアンズなどの海港も, Cooktown 同様に1870年代に発

見された内陸産金地の出入口をなした。タウンズビル南西約135kmに位置する Charters Towers は、1981年現在人口6,823を有して牧畜地域の中心地をなすが、この付近一帯は1870年代から20世紀初頭にかけて Qld の代表的な産金地であった。ケアンズは1870年代に内陸の Hodgkinson 産金地の門戸として開設されたが、後には Herberton など錫鉱山地の海港の役割をも果たした。またカーペンタリア湾南東部 Normanton の東方の Croydon で1887年当時かなりの産金ブームをみた。

同じように N.T.でも、1870年代には今日のダーウィン (1911年まで Palmerston) 南方の Yam Creek, Adelaide River, Pine Creek などの地域で採金への関心が高まってきた。¹³⁾ なおそれらは S.A.による統轄や大陸縦断電信線の建設などが契機となって導かれた。1859年に Qld が N.S.W.から独立して1つのコロニーを形成したために、今日の N.T.は N.S.W.の主要部から切り離されたかたちとなった。¹⁴⁾ 1861年から62年にかけて、探検家 J.M.Stuart が南のアデレードから大陸北岸へと大陸縦断に成功した。このことなどが契機となって S.A.が1863年から N.T.を統轄することとなり、今日の行政拠点であるダーウィン、すなわち Palmerston が1869年に設けられた。さらにこのダーウィンとアデレードを結ぶ大陸縦断電信線が1870年から72年にかけて完成し、ここにアデレードなどオーストラリアの諸都市が、1871年に設置されたジャワとダーウィンを結ぶ海底電信線を通じて海外との結びつきをもつに至った。

ところでアデレードから派遣された B.T.Finniss 探検隊の一員 F.Litchfield¹⁵⁾ が、大陸縦断電信線開設前の1865年にダーウィン南方の Finniss River で金を発見したのが N.T.最初の金発見とされる。さらに1868年から70年にかけて、電信線開設用物資の揚陸地 Southport 近くの Tumbling Waters などで金が発見された。しかしこれらは余り関心と呼ばなかったが、1870年末におけるダーウィン南方約160kmに位置する Yam Creek の電信線設置現場での金発見はとくに注目された。以後 Adelaide River や Cullen River, Pine Creek などで金の発見が相次いでみられた。今日 Pine Creek はダーウィン南東約246km, Stuart Highway 沿いの人口214(1981)ばかりの小さなタウンシップであるが、1870年代には中国人が目立つ産金地のブーム・タウンを形成していた。¹⁶⁾

今日のダーウィンから Pine Creek¹⁷⁾ まで S.A.政府によって鉄道の開通をみたのは1889年であった。この鉄道建設は1886年に始まったが、翌87年にかけて産金地は振わなかった。その主な理由は2年にわたる大変な乾季を経験した上に、隣接する W.A.の Kimberley でゴールド・ラッシュが起こりヨーロッパ人の多くが出かけたからであった。Pine Creek までの鉄道工事の労働力は中国人を主

体にインド人、セイロン人に依存した。¹⁸⁾ちなみに、1890年当時の N.T. の推定人口5,150の内、約80%の4,141がアジア人であった。¹⁹⁾1887年にはこの鉄道建設のために多くの中国人が流入したが、その建設現場で働くことを拒否して産金地に多く出かけるなど、各種の問題が発生した。1888年の中国人移民制限決議で大規模な中国人移住は終結の方向にあった。

ともあれ N.T. の場合、大陸のトップ・エンドをなす今日のダーウィンに比較的近接した地域で金の発見が相次いだ²⁰⁾が、Qld や W.A. のごとき大きなゴールド・ラッシュの展開はみられなかった。なお、大陸中央部レッド・センターのアリススプリングス北東約112kmに位置する Arltunga で、1887年に砂金の発見をみている。この南回帰線直下の Arltunga は、極端な隔絶性と降水量の少ない 'spinifex country' の厳しい自然環境の下にあり、目立ったラッシュを呼ぶまでに至らなかった。しかし19世紀末から20世紀初にかけ、S.A. の有名な Wallaroo や Moonta の鉱山地に以前いたコーンウォール人たち (Cornishmen) によって稼行され、彼らのすぐれた石造物などがその産金地遺構として今に残存している。

さて、1880年代には、W.A. 北部の Kimberley や Pilbara の地方において注目すべきゴールド・ラッシュの展開をみた。²¹⁾とくに Kimberley 地方の Hall's Creek 付近は、文字通り W.A. のゴールド・ラッシュの先駆をなすものであった。Wyndham の南方約375kmに位置する Hall's Creek は、典型的なサバナ気候を示す Ord 川源流域にあり、今日 Great Northern Highway に沿う人口966 (1981) ばかりの小さな内陸のタウンシップをなす。この Hall's Creek 付近で1886年にゴールド・ラッシュが始まり、Kimberley Goldfield が宣言されるに至った。その後1888年にその南西方の Pilbara で、さらに1891年には南回帰線を南に越えて Murchison で、相次ぐ Goldfield の宣言がみられた。

Pilbara 地方における羊牧場での金発見のエピソードについてはかつて言及したが、²²⁾この Goldfield では多くの金掘りたちが酷暑の乾いた赤土台地の谷間を金を求めて彷徨した。例えば、Port Headland 東方に注ぐ De Grey 川水系の Marble Bar 付近などでは大陸屈指の酷暑の谷間に金を求めて人々が押し寄せた。Port Hedland の南東約193kmの Marble Bar は、今日 Great Northern Highway に沿う人口357 (1981) ばかりのタウンであるが、1890年代には Pilbara Goldfield の1つの中心地として、コロニー拠点のパースから約1,486kmも隔たったこの地に登場した。

このように W.A. のゴールド・ラッシュは左回りの方向に飛び火し、最後にパース東方内陸の Kalgoorlie 一帯で1890年代に爆発的なゴールド・ラッシュの

展開をみたことは、かつて詳述した通りである。²³⁾

以上のように、1850年代の Vic. のゴールド・ラッシュから1890年代における W.A. の Coolgardie, Kalgoorlie のゴールド・ラッシュに至る間の期間に、北部の熱帯オーストラリアにおいても、金を求める人たちの動きが海岸から比較的接近し易い大陸縁辺部において左回りの方向に飛火的に展開した。かかる熱帯オーストラリアのゴールド・ラッシュは、その規模において Vic. や W.A. の Kalgoorlie 一帯のゴールド・ラッシュには到底及ばなかったが、熱帯の未開の荒野に不安定ながら鉱山業フロンティアの文明世界を導いたことは注目すべきである。大陸南東の中心部、いわゆる‘ブーメラノ・コースト’²⁴⁾からみれば、かかる熱帯オーストラリア北部はまさしく人口希薄な辺境の地で、労働力不足などから甘蔗農園でカナカ人、産金地で中国人が目立った。いずれにせよ、熱帯オーストラリア北部で19世紀後半に展開したゴールド・ラッシュは、内陸フロンティアというよりむしろ巨視的にはニュージーランドなどと同じ太平洋フロンティアの一環として把握した方が妥当であるかも知れない。

III アウトバックの鉱山業フロンティア

(1) 内陸への鉄道開通

本格的な内陸フロンティアとしての鉱山業フロンティアは、金鉱熱 (gold fever) に浮かされ砂金を追い求める一時的なゴールド・ラッシュによるものではない。それは大規模な鉱脈開発を目指す鉱業投資によって内陸荒野の中に形成されたより安定した文明社会で、海岸からの鉄道建設によって象徴された。かかる鉄道建設は未開の内陸奥地、すなわちアウトバックにみる遠隔性、孤立性を克服して、本格的な鉱山業フロンティアを形成する上に不可欠なものであった。

以前詳論した N.S.W. の Broken Hill や W.A. の Kalgoorlie など²⁵⁾は、内陸フロンティアとしての様相を十二分に発揮した典型的な鉱山業フロンティアであった。Broken Hill は州都シドニーの西方約1,125km, S.A. の州都アデレードの北東約508kmの semi-arid な内陸に位置し、1981年現在人口2万6,913を有する鉱山都市である。Broken Hill の銀、鉛、亜鉛の大鉱脈が最初に発見されたのは1883年であるが、早くも1887年には S.A. の海港 Port Pirie との間に鉄道が開通した。従来のラクダや牛馬の駄獣にとって代わって鉄道の開通をみたことは鉱山業フロンティアの展開に新紀元を画した。

Kalgoorlie は州都パースの東北東約657kmの内陸に位置し、1981年現在人口1万9,848 (Kalgoorlie-Boulder) を数える W.A. 最大の内陸都市である。Kal-

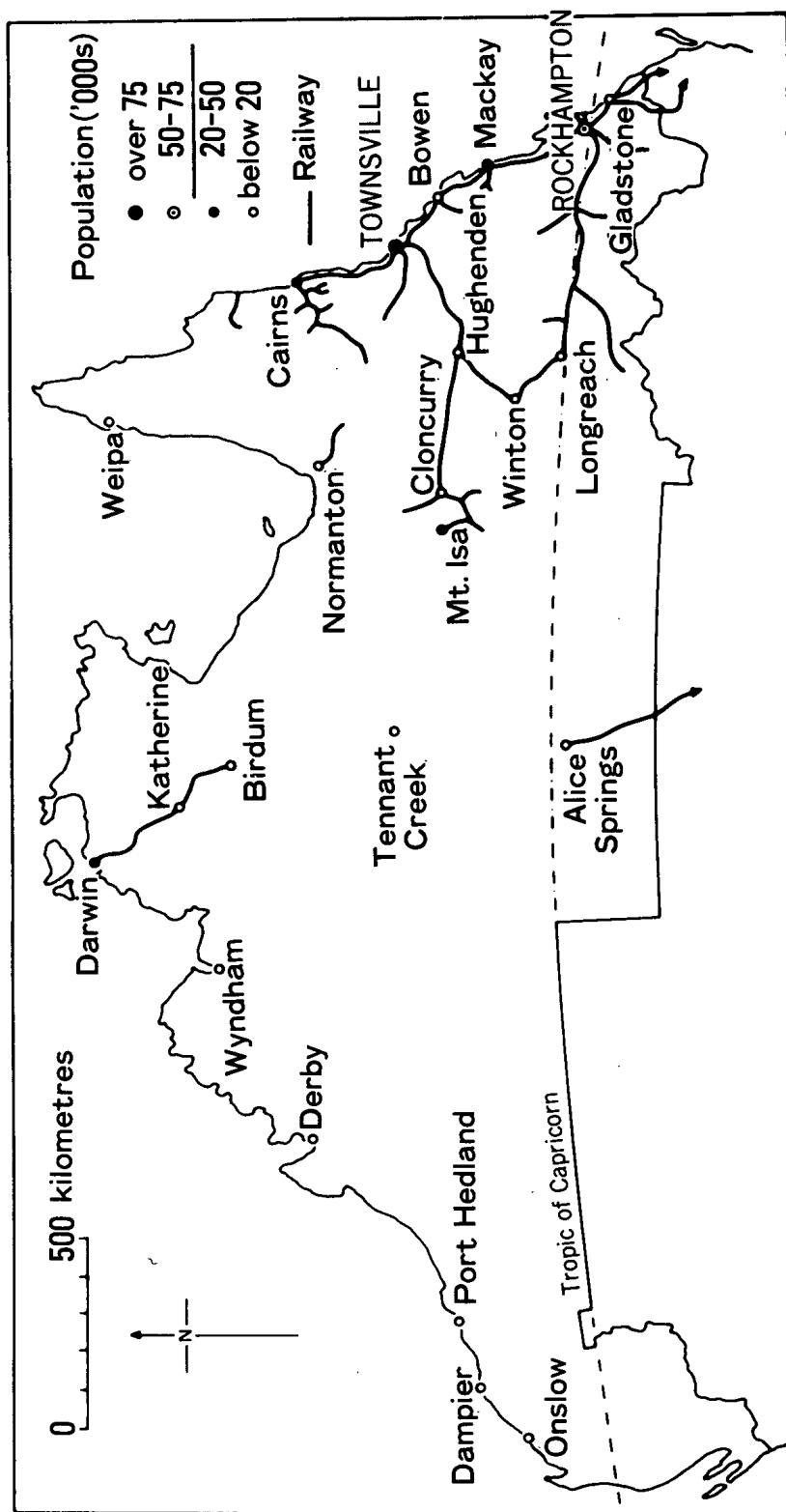
goorlie は1893年に始まる爆発的なゴールド・ラッシュによって出現し、Golden Mile などの大金鉱脈の開発によって急激に台頭したが、パースとの間に早くも鉄道が開通したのは1896年のことであった。なお Kalgoorlie は Broken Hill 同様に年平均降水量が250mm前後の semi-arid な自然環境を構成したが、パース寄りの Mundaring Weir から Kalgoorlie まで長さ約563kmの水供給パイプラインを1903年に完成した。鉄道建設とこの Goldfields Water Supply 計画は、Kalgoorlie の金発見後10年間余の鉱山業フロンティアの展開過程において注目すべき大事業であった。

以上の Broken Hill や Kalgoorlie は、ともに今日、シドニーからパースまでの Indian Pacific ルートの大陸横断鉄道に沿う内陸の主要な urban centres をなしている。なお Broken Hill のごときは歴史的にも結びつきの強いアデレードなど S.A.の鉄道システムの中に含まれてきた。このように Broken Hill や Kalgoorlie は州都と鉄道などで比較的アクセスし易い鉱山都市であったが、辺境の熱帯オーストラリアではそのような内陸の鉱山都市は存在しなかった。

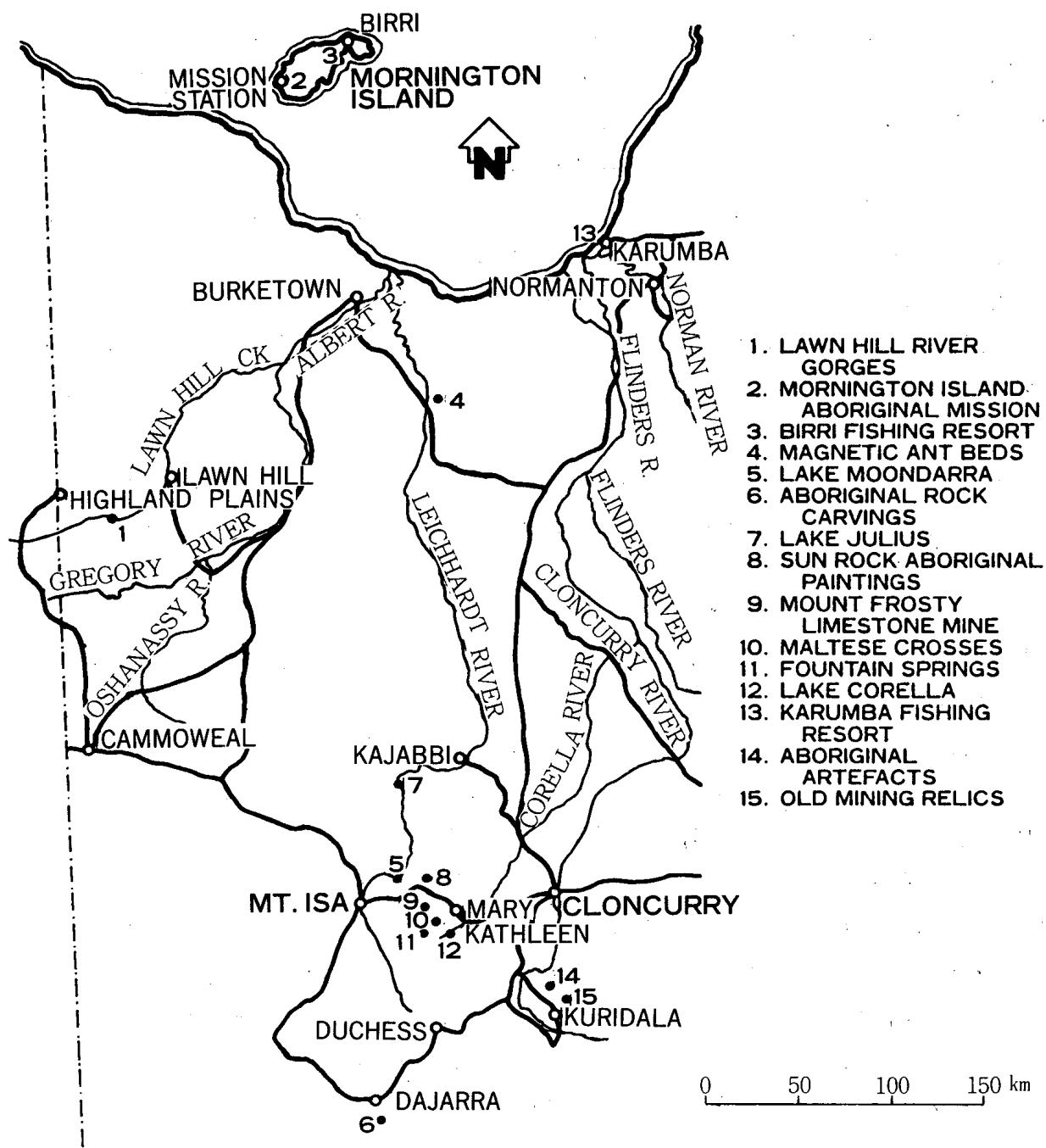
第1図のように、熱帯オーストラリアで海港から最も内陸奥深く鉄道の開通²⁶⁾をみているのは Mount Isa である。Mount Isa は Qld の州都ブリスベーンの北西約1,845km (道路) に位置する銅、鉛、亜鉛、銀などの鉱山地であったが、それらの鉱産物は鉄道で約970km隔たった海港タウンズビルに運ばれ、粗銅はここで精錬の後積み出された。Mount Isa は1981年現在人口2万3,679を数え、Broken Hill や Kalgoorlie と並ぶ人口規模を有する鉱山都市であったが、州都や海港からの遠隔性はそれらを凌駕していた (写真1)。

Mount Isa に直結するタウンズビルは、1981年現在人口8万6,112を数え、熱帯オーストラリア最大の都市である。その発展はすでに言及したように、まず西方内陸の Charters Towers 付近における1870年代以降の産金ブームによって導かれた。この Charters Towers 付近の金鉱開発で、鉄道がタウンズビルの海港から海岸山地を越えて、まず Charters Towers に通じた。さらにこの鉄道、すなわち Great Northern Railway は、低い大分水界を西方に横切って、1887年には Hughenden まで延びた。Hughenden は今日 Charters Towers の西南約246kmにある人口1,657 (1981) ばかりの urban centre で、Qld 北部中央に分布する農牧地域の小さな中心地をなしている。

さらにこの鉄道は1904年には Richmond まで、そして1908年には Cloncurry まで開通した。その支線として、1910年に Selwyn の Mt.Elliott まで敷設され、また1912年には Duchess まで、1917年には Dajarra まで通じた。最終的には Duchess から Mount Isa までの86km余に鉄道が敷設され、1929年に Mount Isa



第1図 熱帯オーストラリアの鉄道とurban settlement
 (Courtenay, P.P.(1978), p.311)



第2図 カーペンタリア湾岸からCloncurry, Mount Isa地域
 [Freedman, L.(ed.): Mount Isa. 裏表紙掲載]

まで開通の運びとなった（第2図、写真10・11・12）。

Cloncurry は今日 Mount Isa の東方約124kmのところに位置する人口1,961（1981）ばかりの urban centre であるが、1867年にいち早く銅鉱が発見され、その付近一帯は銅鉱山地域として脚光を浴びた（写真6）。1908年に鉄道が Cloncurry に到着するまでは、雄牛のひく荷車（bullock dray）や四輪大馬車（coach）、ラクダなどが主要な交通機関であった。1867年銅鉱発見後その開発に乗り出すや、距離的に近い北方のカーペンタリア湾奥 Normanton との間に鉄道を建設することが検討された。この建設問題が進行しない内に、1887年には東方の Hughenden まで Great Northern Railway が開通した。この1887年当時にはすでに言及したように Normanton 東方の Croydon で産金ブームがみられ、Normanton と Croydon の間に鉄道が敷設された。しかし、この1890年代は早魃や労働問題などで不況が続き、Qld 当局自身大きな鉄道建設を進めることができず、結局 Normanton-Cloncurry Railway の建設計画は実現しなかった。したがって1908年に Great Northern Railway が Cloncurry に到達するまでは、さきの Normanton や Hughenden との間の鉱産物や必要物資の輸送は、前記の牛車やアフガニスタン人のラクダチームなどが担当した。ラクダチームは25頭程度で隊列をなし、この内陸地域のいろいろな場所で活躍した。野性化したラクダが今日なおみられ、筆者も1988年8月に Cloncurry 周辺地域でそれを観察した。

ともあれ Cloncurry の場合、銅鉱発見後40年余が過ぎてやっと鉄道が到達した。さきの Broken Hill や Kalgoorlie が発見後3、4年にして開通をみたのとは対比してきわめて対照的である。かかる差異は遠隔性、鉱山開発の規模、鉄道投資の姿勢などによって生じた。いずれにせよこの Cloncurry 地域は、アウトバックに形成された鉄道登場前の鉱山業フロンティアとしてとくに注目される。Cloncurry 西方約124kmの Mount Isa では、1923年に鉛鉱が発見され、1929年に鉄道が到達した。Mount Isa は1940年代に主体を鉛から銅に転換し、1950年代以降に本格的な発展をみるに至ったが、Broken Hill や Kalgoorlie と対比し、ブーム・タウンを導くまでに苦難の過程をたどった。

（2）遠隔地の鉱山業フロンティア—Tennant Creek—

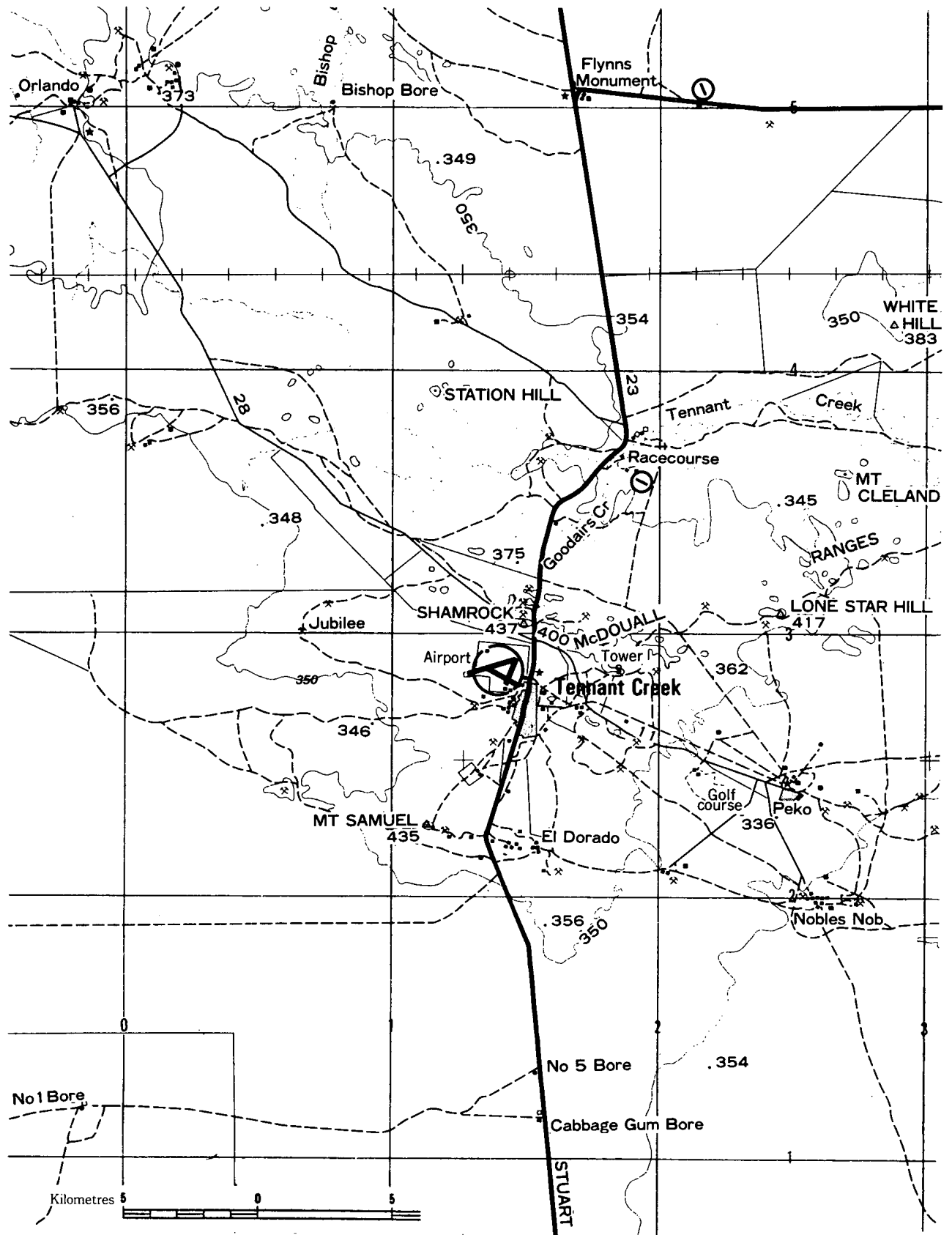
ところで熱帯オーストラリアにおいて、今日、海港から遠く隔たった典型的な内陸の鉱山地といえは、前述の Mount Isa とともに、N.T.の Tennant Creek が想起されるであろう。Tennant Creek は Stuart Highway に沿い電信所（telegraphy station）をもったが、Mount Isa と異なり、とくに海港と直結する鉄道が通じていないだけに、最も遠隔性に富む鉱山地といえるであろう。

Tennant Creek は1981年現在人口3,118を数え、N.T.では Darwin 56,482, Alice Springs 18,395, Nhulunbuy 4,138, Katherine 3,737 に次ぐ人口規模を示す。人口3,000以上のこれらの中で、Nhulunbuy と Tennant Creek が鉱山地のタウンとして知られる。Nhulunbuy はアーネムランドの北東端、カーペンタリア湾口 Gove 半島におけるボーキサイト²⁸⁾開発で1970年代に建設された典型的なカンパニー・タウンである。Gove 半島のボーキサイトは、Nhulunbuy 西方の Melville Bay の天然港まで運び出されている。かかる海港に近い Nhulunbuy に対して、Tennant Creek はダーウィンから南に Stuart Highway で1,035km, S.A.の州都アデレードから北に2,100km余も隔たった大陸内陸部にある（第3図、写真16）。それに鉄道は北のダーウィンから Birdum まで、また南の S.A.方面からはアリススプリングスまで、ともに1929年に開通をみたに過ぎず、かくして Tennant Creek は、南、北両鉄道終端駅の間位置する鉄道のないタウンとして今日に至っている。したがって、主として S.A.方面に向けられてきた鉱産物は、まずアリススプリングスまでの500km余は道路輸送に依存し、それから鉄道輸送に切り換えられてきた。

さて、この Tennant Creek 付近で金が最初に発見されたのは1920年代と伝える。しかしこの地域は極端な遠隔性をもつ上に、Mount Isa 同様にいわゆる 'spinifex country' としての荒涼とした厳しい自然環境の中にあり（写真13・14・17）、利用し得る水も非常に限られていたために、1933年まではほとんど顧みられなかった。1933年になって1人の探金者が Tennant Creek の南西10km近くのところで富鉱を発見し、まず9トンの鉱石をアリススプリングスまで道路輸送し、そこから、最も近い Government battery のある、アデレードの北約254km の Peterborough まで約1,328kmを鉄道で輸送し分析した。その結果、9トンの鉱石から23オンスの金が得られ、相対的に莫大な輸送費がかかるもののそれに耐え得るだけの富鉱であることが判明した。

この富鉱発見のニュースを契機に、1933年から34年にかけて The Granites³⁰⁾など各地から鉱山業者が集まり相次いで金鉱が発見された。前述のように鉱石は S.A.の Peterborough まで運ばれ、ここで碎鉱処理にかけられた。なお The Granites は Tennant Creek 電信所の西南西約416kmのところに位置し、世界恐慌期に入って N.T.で最初にゴールド・ラッシュをみた場所であった。The Granites で1932年に金の富鉱床が発見されたというニュースが南部諸州に伝わりラッシュの展開をみたが、それに失望した鉱山業者たちの一部は早くも翌1933年には Tennant Creek に移った

Tennant Creek にやってきた初期の探金者たちは皆元気旺盛であった。なか



第3図 Stuart Highway沿いのTennant Creekとその付近
 [Australia 1 : 250000, SE53-14 Tennant Creek 1973,
 Commonwealth of Australiaの1部]

でも隻眼の Jack Noble は、Kimberley で牛の事故から盲目となった友人 William Weaber を呼び寄せた。盲目の Weaber は 1 万 2,000 頭の牛を売って、彼の家族とともに Tennant Creek に移り、Noble と 2 人でただ 1 つのよく見える目で探鉱に従事したという。このエピソードは牧畜業者から鉱山業者への転身を伝えるが、ともあれ Noble と Weaber のパートナーシップによって、まず Rising Sun で、さらに Noble's Nob や Weaber's Find で金の富鉱が相次いで発見された。Alroy Down Station の牧場主 Rudolph Schmidt もかかる様相に関心を示し、Peko, Lone Star, Golden Forty, Northern Star などを含むいくつもの鉱山の利権をもった。Schmidt の有する掘り抜き井戸の 1 つで鉱業目的に使える豊かな水を発見し、彼のグループである Tennant Creek Development Syndicate は、吸上げガスエンジン (suction gas-engine) で稼働する 1 つの battery を設立するなど、開発事業をかなり推し進めた。

1934 年から 35 年にかけて、Tennant Creek の地域は 'boom mining camp' の様相を呈し、人口も 500 から 600 に達し、その中には 45 人ばかりの婦人や 20 人ばかりの子供の姿もみられた。この Goldfield の宣言は相次ぐ金鉱の発見で何回か延期された。結局 1935 年に 2,140 平方マイルの面積が Goldfield に宣言されるに至った。当時、この Goldfield における借区数は 140 にも及んだといわれる。とくに内務大臣 Hon.T. Paterson の現地訪問によってこの場所の重要性が一層脚光を浴びたが、彼は適当なタウンシップの位置選定調査や鉄筋公共建造物などの建設について指示を与えた。警察署や学校もでき、さらに病院も建設されて Government doctor が任命された。また Mount Isa へ週 1 回定期的に飛ばすための飛行場の敷地も設定された。さらに 1935 年当時、Tennant Creek Batteries N.L. の浮遊選鉱とともに、碎鉱設備を建設し稼働させることに関心が向けられていた。

なお 1935 年には、アリススプリングス北東約 112km の Arltunga において穏やかなラッシュがみられた。この Arltunga についてはすでに言及したが、1887 年の金発見後 1890 年には、S.A. の Government geologist の H.Y.L. Brown が S. A. の Oodnadatta からラクダでこの場所を訪れている。Oodnadatta は S.A. の北部乾燥地にあり、鉄道がアリススプリングスへ延びる 1929 年までは鉄道終端駅として大陸中央部への前進基地をなしていた。このように Arltunga の地域は、1929 年までは最も近い物資供給中心地が鉄道終端地 Oodnadatta といったように、極端な遠隔性を有する過酷な条件下の鉱山業フロンティアであった。

IV Selwyn Ranges 付近にみる遠隔地集落の形成

(1) 部族テリトリーへの鉱山業進出

前述のように、ダーウィンから Birdum まで、S.A. 方面からアリススプリングスまで、さらにタウンズビルから Mount Isa までそれぞれ鉄道が延びたのが同じ1929年で世界恐慌の始まった年であった。遠隔性に富む Mount Isa の鉱山発見は1920年代のことで、1880年代の Broken Hill や1890年代の Kalgoorlie より遅く、Tennant Creek 同様に今世紀にかなり入ってからであった。しかし、Mount Isa の東方約124kmの Cloncurry 付近ではすでに言及したように1860年代に銅鉱が発見され、Mount Isa 登場以前の19世紀後半にすでに1つの銅鉱山地を形成していた。

かかる Cloncurry と Mount Isa は、北のカーペンタリア湾に注ぐ Cloncurry 川 (Flinders 川の支流) と Leichhardt 川の上流域、すなわち Selwyn Ranges に形成された幅広い河谷に位置した。Selwyn Ranges は北部のカーペンタリア湾水系と南部の広大なエア湖内陸水系との間の分水界をなし、N.T. 北東部の草原 Barkley Tableland の南東に続いた。Mount Isa の年平均降水量は390mmで夏に集中した。あとは長い乾季が続いて、赤土に spinifex など乾燥に強い草が生えるいわゆる 'spinifex country' の景観を展開し、近寄り難い赤い岩山などとともに、熱帯内陸乾燥地の自然環境を構成した。

Selwyn Ranges の河谷一帯は、ヨーロッパ人の進出以前には、オーストラリア原住民の中でも最も荒々しい部族の1つといわれた Kalkadoon 族のテリトリーであった。いうなれば Cloncurry や Mount Isa 一帯は、部族テリトリーとしての Kalkadoon country の中心部を形成していた。彼ら Kalkadoons は定住家屋を持たず、槍やブーメランでカンガルー、エミューなど射止める狩猟や、採集の移動生活を営んでいた。しかし彼らの生活行動はすべて一定の限られた範囲、すなわち部族テリトリーの中で展開された。³²⁾

さて、この Kalkadoon country にやってきた最初のヨーロッパ人は、かの悲劇の探検隊で知られる Burke と Wills らの一行であった。このパーティは1860年末から1861年にかけて、南の内陸水系 Cooper's Creek 方面から、初期の探検家たちが 'Plains of Promise' と呼んだ北のカーペンタリア湾岸方面を探検した。苦難の旅を続けた彼らはその帰途、今日の Cloncurry, Duchess 付近に至り、Mount Isa の南東100km足らずのところの岩山に登ったと伝える。³³⁾ Cloncurry 川の名は、Robert O'Hara Burke が彼の故国のアイルランドに住む従姉妹の Elizabeth Cloncurry からとったとされる。なお Burke と Wills の名は、分水界 Selwyn Ranges から南に流れる小さな Creek 名などとして伝えている。

ところでこの Cloncurry 地域で Ernest Henry が最初に銅鉱を発見したのは、Burke らが通り過ぎてから 6 年が経過したばかりの 1867 年のことであった。Henry はクリミア戦争に従軍した後、1857 年に Red Jacket 号でオーストラリアに移住し、Vic. の Ballarat や Bendigo の産金地を転々とした。その後彼は Qld 北部に向かい、1863 年までに Hughenden などで 4 つの牧場を所有した。Hughenden についてはすでに言及したが、その名は Henry が彼の母の生地になんでつけたものといわれる。しかし牧場経営は不振をきわめ、彼はそれに見切りをつけてカーペンタリア湾岸方面への苦難の旅に出かけた。彼は前記の Hughenden への帰途 Cloncurry 付近に立ち寄ったが、このことが契機となって Cloncurry 付近への関心を高め、ついに 1867 年の 5 月 20 日、'gossan' と称する赤錆堆積物をもつ露頭に自然銅の鉱脈を発見し、それに彼は 'The Great Australia'³⁴⁾ と命名するに至った。

Henry は 30 人ばかりのコーンウォール人を雇い、1868 年 5 月 7 日から稼行を始めたが、その隔絶性をはじめ、炎熱、砂ほこり、はえ、孤独など各種の大きなハンディキャップの前に採掘は間欠的であった。なお 1867 年 9 月には Holmes によって Cloncurry 南の Selwyn Ranges で金が発見され、1869 年 2 月当時には 2 つの産金地がみられた。1870 年 1 月当時、Cloncurry 地区で 45 の miner's licenses がみられており、人口はヨーロッパ人 100、中国人 40 程度を数えたが、Cloncurry 周辺での砂金採取が目立³⁵⁾った。

1876 年 1 月にはカーペンタリア湾岸 Normanton の測量技師 Bishop が幅広い街路をもったタウンシップを設計し、河川名をとってその名を Cloncurry とした。なおこのタウン・セクションは 10×5 chains で、その各 5 エーカーを割当分 (allotments) とし、ストリートは 1 chain、メインストリートは 2 chains とした。タウン・セクションの 10×5 chains (ほぼ 200m×100m) は、W.A. の Kalgoorlie や Coolgardie の基礎ブ³⁶⁾ロックと同じであった。貯水や墓地、留置所などのための保留地も設けられた。

このように居住空間の整備が進められ、さらに 1884 年に Cloncurry は 1 つの地方行政区域としての shire を形成するに至った。この行政区域は Cloncurry Divisional Board の管轄下に置かれた。病院は 1879 年に設けられ、1884 年から耐久性の建物となった。学校は 1884 年 3 月に 13 人の生徒でもって暫定的に開校し、それは 1894 年に 1 つの state school となった。治安関係では 1885 年 9 月に police barracks が、また 1898 年 7 月には courthouse が Cloncurry に設けられた。それらは Burketown, Winton, Mitchell などの管轄に折々に置かれてきたが、1906 年になって Cloncurry 自体がその地域の司法関係などのセンターと

なった。早くも1889年には *Cloncurry Advocate* (*North-West Star* の前身) なる新聞も発刊された。なお1887年には気温が127.5°F(shade)³⁷⁾にも上がる、オーストラリアの記録的な高温が Cloncurry で測定されている。

ともあれ19世紀後半に入り、Kalkadoons の生活空間の中に鉱山業や牧畜業などを通してヨーロッパ人の進出がみられ、皮相的ながら文明社会の居住空間が形成されていった。Kalkadoons は好戦的な部族で知られたが、ここに当然彼ら native people とヨーロッパ人たちの foreign people との間にもろもろのトラブルが発生した。この Cloncurry 付近は初期の探検者たちによって牧場適地として報告され、事実 Cloncurry Shire には20,000平方マイル以上に及ぶ広大な牧場地区が含まれていた。Kalkadoons がこの牧場地区に導入されてきた牛に対して食用のために槍で危害を加えるなどしたために、初期牧畜業者との間に鋭い対立をみた。ときにはマスカット銃をもった騎馬警官などに対しても、Kalkadoons が槍やブーメランでいどみかかるなど両者の間に激しい衝突がみられたと伝える。かかる移住者とのトラブルのほか、1890年代には移住者のもたらした麻疹 (measles)³⁸⁾ など伝染病の合併症などで多くの Kalkadoons が死亡したといわれる。

かくして Kalkadoons たちはしだいに彼ら独自の言語、文化、さらには狩猟採集の場などを失っていった。やがて Kalkadoons はタウン近くにキャンプしてヨーロッパ人からの小麦粉、砂糖、ラム酒などの施し物を待つという、いわゆるタウン縁辺居住者として、表面的ながら文明社会との接触をもつようになった。³⁹⁾ 彼らは一方でヨーロッパ人に対し友好的な側面も示した。かの Henry は見本を示すことによって原住民から鉱脈露頭を案内され、Argylla⁴⁰⁾ と Mount Oxid の2つの鉱山を1880年12月以降新しく発見することとなった。Argylla では後には原住民労働力で採掘されたといわれるが、Kalkadoons は後には牧場使用人としても働いた。

さて、最初に発見された Great Australia Mine については、スコットランドの投資家がこれを Henry から買収して、1884年には Cloncurry Copper Mining and Smelting Company を設立した。この会社は200人ばかりを雇用し、苦難の末に製錬にも漕ぎ着けたが、結局挫折して1887年閉山した。この時代の砂金採取もすたれ、Cloncurry 鉱山史の最初の章は終わった。⁴¹⁾

(2) 遠隔地集落の展開—Cloncurry 地域—

1897年にタスマニアの Mount Lyell 銅鉱山が台頭し、それに刺激されて Cloncurry 地域における鉱業開発の気運が再度高まってきた。20世紀に入り銅価格も回復し、さらに1907年から鉄道とより豊かな資本の到来がみられ、1910

年代において Cloncurry の鉱業地域は 1 つのブームを経験した。1913年には Mt.Elliott, Mt.Cuthbert, Hampden-Cloncurry, Duchess をはじめ多くの鉱山から 85,000 トン (666,000 ポンド) の鉱石を採掘した。1915年には Kuridala と改名した Friezla や, Selwyn, Duchess などのタウンが成立した。1914年当時これらの Cloncurry 地域には 40 ばかりホテルもでき鉱山や牧場で働く人たちが大変な繁昌をみせた。製錬所をもつ Kuridala も 1918 年当時は人口 2,000 余を数えるタウンであった。しかし第一次世界大戦後の銅価格の下落, 経営上のトラブルなどから鉱山は解雇, 没落への途をたどり, 早くも 1920 年には製錬所も閉鎖をみるに至った。⁴²⁾

かかる銅鉱山などの衰退後も, Cloncurry は周辺の牧畜地域ならびに地域コミュニケーションの中心地としての役割を果たした。もし鉱山業のみで牧畜業をもたなかったならば, 他の鉱業中心地 (mining centre) 同様に Cloncurry はゴースト・タウンになったであろう。前述のように Cloncurry は, 19 世紀後半の鉱山業フロンティアとして形成されたが, それが遠隔地集落としてのアイデンティティを確立していったのは, むしろ 1920 年以降の鉱山衰退期であった。すなわち遠隔地集落としての Cloncurry のアイデンティティは, 遠隔地方 (remote country) の地域中心としての機能的側面に見出しうると考える (写真 7・8)。

当初のバラックや差掛け小屋 (lean-to), テントなどの一時的な建物にとって代わって, 鉄道開通の 1907 年以降には教会, 銀行, 警察署, 裁判所, シャイア・ホールなど中心地的機能をもつより永久的な建物が Cloncurry で目立ってきた。鉄道が開通した 1907 年には, 早速 Cloncurry に英国国教会とカトリック教会が設立され, さらに 1915 年にはメソジスト教会もできた。従来はまず東方海港タウンズビルの教会などを拠点に, 内陸奥地の伝道活動が進められた。例えば英国国教会では, 1902 年までは Cloncurry はタウンズビルのセント・ジェームズ教会の教区に属していた。アウトバックの広大なブッシュの中で孤独な生活を営む人々の伝道を意図し, いわゆるブッシュ会員 (Bush Brothers) のホールやハウスなども設けられた。また 1927 年にはメソジスト奥地伝道所 (Methodist Inland Mission) の開設をみるなど, Cloncurry を拠点とした伝道活動が目立った。⁴³⁾

19 世紀末期に設けられた警察, 裁判所関係の施設も 1908 年から 1922 年にかけて整備され, とくに Cloncurry は 1910 年には巡回裁判所のセンターとなった。また Queensland National Bank (後に National Bank of Australasia に合併) と Bank of New South Wales の 2 つの銀行が 1914 年当時 Cloncurry

に立地しており、ビジネスなどの金融拠点ともなった。⁴⁴⁾

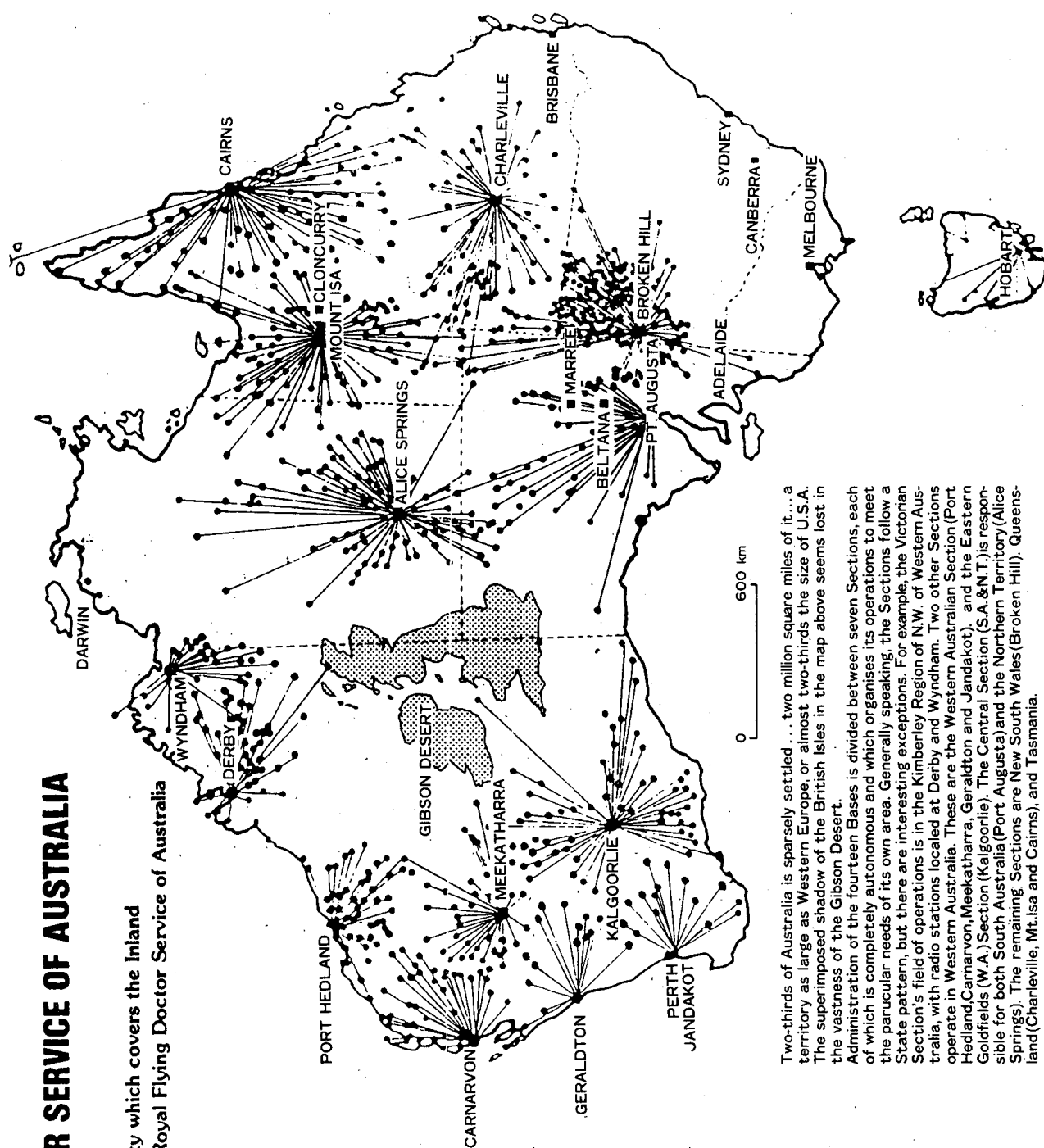
なお鉱山衰退期に入った1921年には、従来の風車井戸などにとって代わって水供給ネットワークのサービスが開始されるなど生活空間の整備が進められた。すなわち Cloncurry 川の河床に直径9フィートの井戸を掘り抜き、その水をタウン西方の丘に貯水してタウンに配水するネットワークシステムをとるに至り、従来各地に分布した井戸を閉鎖することとなった。しかし1928年ころまでは井戸利用などで腸チフスが周期的に広まった。さらに水供給問題の永久的な解決策として Cloncurry 川上流の Slaty Creek にダムを建設する計画が進められた。いずれにせよ10月から12月までの間だけは長い乾季の末期だけに家庭への水供給を制限せざるをえなかった。⁴⁵⁾

ところで鉱山衰退期に入った1920年代において、遠隔地集落の Cloncurry が地域の中心としてのアイデンティティを端的に示すに至ったのは、1922年の定期航空便の開設と、1928年の Flying Doctor Service (F.D.S.) の開始であった。なお他とのコミュニケーションの面ではまず1888年にカーペンタリア湾に近い Normanton へ1本の電信線が通じ、1912年には電話交換局が Cloncurry に開設された。1907年の鉄道開通よりかなり遅れて、1922年にはブリスベーン西方奥地の Charleville と、その北西方の Longreach と Cloncurry の間に Qld 最初の定期航空便が Qantas によって設けられた。Qantas はかかる Qld と N.T. の航空業務から出発して、後には世界各地に空路をもつ航空会社に発展した。なお1931年当時、Cloncurry は州都ブリスベーンから Qld 北西部の Camooweal—Cloncurry—Normanton と結ぶ Qantas 航空路の拠点となしていた。かくしてブリスベーンから飛んできた‘Southern Cross’号の姿が Cloncurry の飛行場にみられるようになったが、これはまさしく内陸奥地の遠隔性を克服していく航空機時代の到来を告げるものであった。

さらに注目すべきは、1928年にオーストラリア最初の Flying Doctor Service (後の Royal F.D.S.) が Cloncurry で始められたということである(第4図、写真8)。大陸の北部、中央部のアウトバックで孤立的な生活を営む人々に対して軽飛行機で医療サービスをするというアイディアは、長老派教会の牧師で Australian Inland Mission を1912年に組織した J.Flynn によるものであった。この Flynn の前記ミッションが、連邦政府の補助などをも受けて、1928年に最初の Aerial Medical Service 基地を Cloncurry に設けたのが、オーストラリアにおける F.D.S. の始まりであった。かかる F.D.S. 基地として Cloncurry が最初選ばれたのは、当時の Cloncurry が大陸奥地でも鉄道、電信、航空などコミュニケーション関係のサービス機能が集まる内陸フロンティアの典型的な拠点で

ROYAL FLYING DOCTOR SERVICE OF AUSTRALIA

The Mantle of Safety which covers the Inland
from the Fourteen Bases of the Royal Flying Doctor Service of Australia



Two-thirds of Australia is sparsely settled... two million square miles of it... a territory as large as Western Europe, or almost two-thirds the size of U.S.A. The superimposed shadow of the British Isles in the map above seems lost in the vastness of the Gibson Desert.

Administration of the fourteen Bases is divided between seven Sections, each of which is completely autonomous and which organises its operations to meet the particular needs of its own area. Generally speaking, the Sections follow a State pattern, but there are interesting exceptions. For example, the Victorian Section's field of operations is in the Kimberley Region of N.W. of Western Australia, with radio stations located at Derby and Wyndham. Two other Sections operate in Western Australia. These are the Western Australian Section (Port Hedland, Carnarvon, Meekatharra, Geraldton and Jandakot), and the Eastern Goldfields (W.A.) Section (Kalgoorlie). The Central Section (S.A. & N.T.) is responsible for both South Australia (Port Augusta) and the Northern Territory (Alice Springs). The remaining Sections are New South Wales (Broken Hill), Queensland (Charleville, Mt. Isa and Cairns), and Tasmania.

第4図 オーストラリアのRoyal Flying Doctor Service
基地の分布とそのサービス・エリア
〔Mount Isa Baseにて収集〕

あったことを物語っている。F.D.S.の開始とともにそのサービス・エリアは、北はカーペンタリア湾に近い Burketown、南は内陸水系の Boulia などに及ぶ広大な地域にわたった。なお1927年には西方 Mount Isa の鉱山におけるけが人の緊急輸送に Qantas の飛行機がチャーターされたが、Mount Isa 自体も初期には Cloncurry の F.D.S.のエリアに入っていた。⁴⁶⁾

(3) Mount Isa の登場

さて、以上のごとき1920年代の Cloncurry に対して、その西方約124kmの Mount Isa では1923年に John Campbell Miles が鉛鉱を発見し、さらに1929年には鉄道が Duchess から Mount Isa まで延びた。このように1920年代後半には内陸フロンティアとしての鉱山業フロンティアの西漸傾向がわずかながら現われてきた。

Mount Isa の鉱山発見者 Miles が最初に鉱山に関係したのはかの Broken Hill で、彼は1907年ころここで1年近く坑夫として働いた。なお彼の父も過去においてニュージーランドから Qld へとゴールド・ラッシュの地を約16年間も追いかけた経験を有していた。かくして Miles 自身も鉱山への関心が高まり、N.S.W.から Qld へと転々と旅をなし、1923年2月には Cloncurry の南西方に位置する Duchess の人影ない小さなタウンシップにやってきた。酷暑の夏であったが、彼は N.T.方面への金探しのために Duchess から馬で北西方の N.T. 境に近い Camooweal に向かった。途中、Duchess から95kmばかり行ったところの Leichhardt 川のほとりでキャンプを張った。雨季の夏とはいえ水が乏しく、河床に小さな水だまりを見出し、その近くの大きなユーカリ (white gums) の木立の陰にキャンプを設営した。実はこのキャンプ地から河谷を横切って1kmばかりのところで鉛鉱脈を発見したと伝えるが、これが Mount Isa 鉱山史の始まりであった。⁴⁷⁾

Miles は見つけた鉱石見本をすぐに Cloncurry の政府分析人に届けたが、その結果49%から79%の鉛を含む富鉱であることが判明した。これらのニュースが契機で、1923年の11月、12月ころには近くの銅鉱山や牛牧場などからの人々の行列が、ブッシュの中でこぼこ道を Mount Isa へと急いだ。かくしていわゆるオプチミズムの新しい時代がこの Mount Isa の地域に訪れ、小屋掛けの人々が夏の炎暑の中、各借区の杭打ちや採掘作業に入り、spinifex の生える丘陵にそれらの音がこだましたと伝える。しかし、かの Ballarat や Kalgoorlie の産金地のように爆発的に出現したロマンチックなブームなどとは到底対比しうるものではなく、Duchess-Cloncurry 地域の人々の関心を誘う程度であった。⁴⁸⁾

ところで翌1924年の1月には、Mount Isa Mines Limited (M.I.M.) の鉱山

会社が10万ドルの資金で発足したが、この会社の設立に当たったのは W.H. Corbould であった。彼は第一次世界大戦中のブーム期には Cloncurry 地域の Mount Elliott の銅鉱山を所有していた。Corbould はシドニーに赴いて鉱山会社の設立に必要な資金の調達をはかり、たちまちにして多くの鉱山借区を一手に収めて今日に至る 1 会社独占の基礎を築くに至った。しかし会社を設立したものの前途は多難で、人々をここに集めるにしても 1 つのタウン、もろもろの生活諸施設、それにダムなどを建設せねばならず多額の資金を必要とした。かの Broken Hill と同じ鉛、銀の鉱山であっても、Broken Hill と対比し、鉱石の質、海港までの距離などにおいてその不利はまぬがれえなかった。Corbould はこの鉱山の将来性を強く信じてその資金繰りに奔走し、ついに1927年に国際的な鉱業資本家 John Leslie Urquhart⁴⁹⁾と接触をもつことに成功した。

Urquhart はロンドンの著名な鉱山会社であった Russo-Asiatic Consolidated Limited を創設し、かつては広くロシアの鉱山開発を手がけていたが革命でロシアの鉱山、鉄道のすべてを失った。彼が Corbould との接触を契機に Mount Isa の有望性に着目し、その資金援助に乗り出したことは、Mount Isa の前途に 1 つの光明を与えた。鉱山発見後 4 年過ぎた 1927 年に至り、ここに鉱山は急に活気を帯びた。かの Cloncurry 南方の衰退した銅鉱山地 Kuridala や Selwyn などから建造物が馬車で Mount Isa に運ばれ、人口も 400 ばかりを数えた。教会、ホテル、裁判所、製氷所などもできて、その生活空間は漸次オプチミズムの高まりをみせた。⁵⁰⁾

すでに 1925 年には Duchess から Mount Isa まで鉄道を延ばす法案が通過しており、1929 年 4 月には最初の汽車が Mount Isa に到着した。この同じ月に Rifle Creek Dam が完成し、やがてこのダムと鉱山までの間に約 32km のパイプラインが敷設された。なお会社の住宅などへの家庭用水は会社地所の井戸から供給された。当時会社の住宅施設は 18 の職員住宅、263 の家族住宅、1 つの大きな独身者用寄宿舍などからなり、鉱山における生活のアメニティを高めるために各種の策も講じられてきた。⁵¹⁾なお 1932 年ころの写真によれば、Leichhardt 川の左岸、鉄道駅南の線路両側に広くテント・コロニーが形成されていた。テント・ハウスは二重屋根構造のため比較的涼しかったといわれる。⁵²⁾

ところで早くも 1930 年には坑内水没放棄の危機に直面し、坑内排水問題などの解決が急務であったが、当時すでに世界恐慌が始まっており、資金繰りが一段と難しくなっていた。かかる技術、資金両面にわたって Mount Isa の難局を打開するために American Smelting and Refining Company が乗り出すことになり、当会社の Julius Kruttschnitt⁵³⁾が Mount Isa の M.I.M. 会社の総支配人に

決まった。彼はこの任に着くために1930年11月にアメリカを去ったが、解決すべき多くの難問が彼を待ち受けていた。まず着任するや鉛価格の急落がみられ、オーストラリア鉱山史上最大のコスト高鉱山といわれた Mount Isa にとっていかんともし難かった。ついに負債がかさんで1933年の9月には N.S.W. の会社としての M.I.M. 会社は破産し、Mount Isa の事業全体は新しく形成された Qld の会社としての M.I.M. 会社に帰属することとなった。これは Qld の州経済において、Mount Isa が将来において必ず重要な役割を果たすにちがいないという強い期待感を示すものであった。

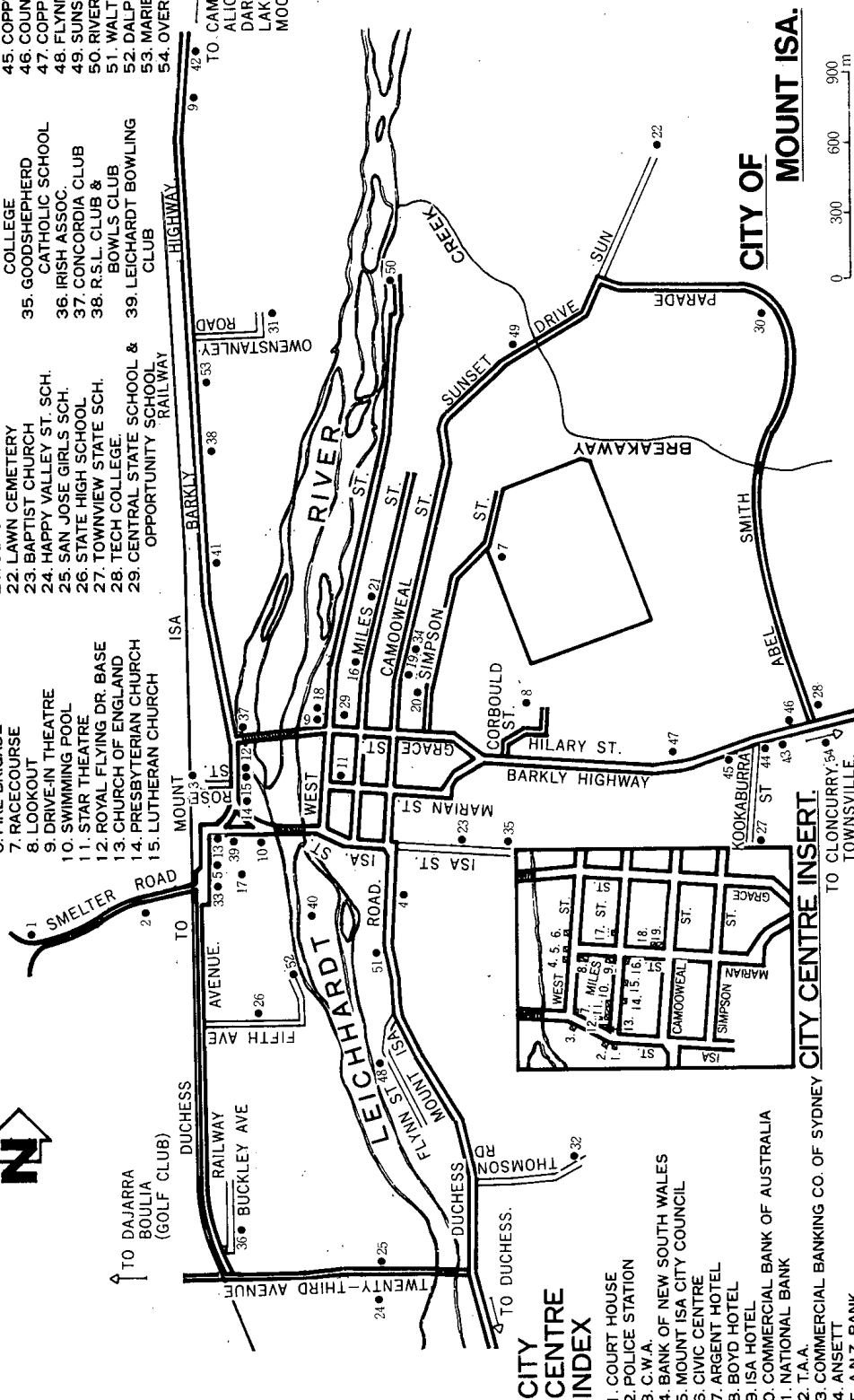
このように鉱山発見後10年が過ぎた1933年ころは、まさに世界大恐慌をくぐり抜ける苦難のときであったが、ともかく M.I.M. 会社は約1,000に及ぶ人たちに仕事を与えていた。鉱山の難局にもかかわらず、Rifle Creek Dam からタウンへの水供給ネットワーク・システムが設置されるなど、タウン・コミュニティ自体は少しずつ持続性の方向に向かっていった。しかし居住施設は不足の上に貧弱であり、それに野菜、ミルク、果物などの新鮮食品の不足など居住環境の整備の必要性が指摘された。⁵⁴⁾

1934-35年ころから鉛価格も持ち直し、1937年にははじめて利益があがって M.I.M. 会社史上特筆すべき年となった。この1937年には前記の Kruttschnitt が総支配人から M.I.M. 会社の会長に就任した。ところで第二次世界大戦に入り、Mount Isa の鉛生産の将来性に陰りが見え始め、会長の Kruttschnitt 自身も1941年の8月以降は鉛市場に見通しが立たないと言明するに至った。ここに鉛から銅へと、鉱山全体の生産態勢の切り換えがこの大戦中に台頭することとなった。そして戦後の1947年の7月には M.I.M. 会社創立後23年にしてはじめて株配当金が支払われた。さらに Broken Hill の Zinc Corporation の総支配人などつとめた George Read Fisher が1952年に Mount Isa の M.I.M. 会社に招聘され、やがて Kruttschnitt の後を継いで会長に就任した。さらに新会長 Fisher は J.W. Foots を Broken Hill から迎え入れた。ここに Mount Isa におけるアメリカ人の経営時代は終りを告げ、文字通り Broken Hill から迎え入れたオーストラリア人の経営陣のもとに、Mount Isa は1960年代以降大躍進を遂げていった。⁵⁵⁾

Mount Isa の人口は1947年の3,500から1961年には1万3,976を数えていわゆるブーム・タウン期⁵⁶⁾にあり、1971年には2万2,000、さらに1973年には約3万とピークを形成した。ここに Mount Isa は熱帯オーストラリア最大の内陸都市として、海港タウンズビルから西方に鉄道で約970kmも隔たる内陸奥地に君臨するに至った（第5図、写真2・5）。

CITY INDEX

1. ISA MINE VISITORS CENTRE
2. ISA MINE GENERAL OFFICE
3. RAILWAY STATION
4. HOSPITAL
5. AMBULANCE CENTRE
6. FIRE BRIGADE
7. RACECOURSE
8. LOOKOUT
9. DRIVE-IN THEATRE
10. SWIMMING POOL
11. STAR THEATRE
12. ROYAL FLYING DR. BASE
13. CHURCH OF ENGLAND
14. PRESBYTERIAN CHURCH
15. LUTHERAN CHURCH
16. METHODIST CHURCH
17. CATHOLIC CHURCH
18. SALVATION ARMY
19. CATHOLIC CHURCH
20. LUTHERAN CHURCH
21. JEHOVAH'S WITNESS
22. LAWN CEMETERY
23. BAPTIST CHURCH
24. HAPPIY VALLEY ST. SCH.
25. SAN JOSE GIRLS SCH.
26. STATE HIGH SCHOOL
27. TOWNVIEW STATE SCH.
28. TECH COLLEGE
29. CENTRAL STATE SCHOOL & OPPORTUNITY SCHOOL RAILWAY
30. SUNSET STATE SCH.
31. STATE SCH.
32. HEALY STATE SCH.
33. ST. JOSEPH'S CONVENT
34. CHRISTIAN BROS. COLLEGE
35. GOODSHEPHERD CATHOLIC SCHOOL
36. IRISH ASSOC.
37. CONCORDIA CLUB
38. R.S.L. CLUB & BOWLS CLUB
39. LEICHHARDT BOWLING CLUB
40. MT ISA BOWLING CLUB
41. BARKLY HOTEL
42. INLAND MOTEL
43. SILVER STAR MOTEL
44. TOWNVIEW MOTEL & CARAVAN PARK
45. COPPER GATE MOTEL
46. COUNCIL CARAVAN PARK
47. COPPER CITY MOTEL
48. FLYNN ST CARAVAN PARK
49. SUNSET CARAVAN PARK
50. RIVERSIDE CARAVAN PARK
51. WALTONS MOTOR COURT
52. DALPURA MOTEL
53. MARIE KRUTSCHNITT CLUB
54. OVERLANDER HOTEL



CITY CENTRE INDEX

1. COURT HOUSE
2. POLICE STATION
3. C.W.A.
4. BANK OF NEW SOUTH WALES
5. MOUNT ISA CITY COUNCIL
6. CIVIC CENTRE
7. ARGENT HOTEL
8. BOYD HOTEL
9. ISA HOTEL
10. COMMERCIAL BANK OF AUSTRALIA
11. NATIONAL BANK
12. T.A.A.
13. COMMERCIAL BANKING CO. OF SYDNEY
14. ANSETT
15. A.N.Z. BANK
16. POST OFFICE
17. COMMONWEALTH BANK
18. LEICHHARDT BOARDING HOUSE
19. VERONA MOTEL

第5図 Mount Isaの中心部
〔Freedman, L.(ed.): Mount Isa. 裏表紙掲載〕

あとがき

かつて言及したように、P.W.Paul はカリフォルニアの Sierra Nevada 地方において1848年の金発見から最初の10年間で⁵⁷⁾本当の意味での「鉱山業フロンティア」であったと指摘しているが、筆者もオーストラリアの Broken Hill においてこの最初の10年間に着目した。すなわち Broken Hill ではテント・タウンからブーム・タウンへの最初の10年間で⁵⁷⁾試みにフロンティア・コミュニティとしてとらえる視点に立った。

ところでかかる Broken Hill に対比し、Mount Isa の場合、鉱山発見後10年間の内その後半には世界恐慌に遭遇し、まさに存亡の危機の中に鉱山業フロンティアの展開をみた。Mount Isa がテント・タウンから本格的にブーム・タウンへの過程をたどるのは1950年代からで、発見以来30年余りの歳月を経過してからであった。その間 Mount Isa は、世界恐慌や大戦などの変動期をくぐり抜け、さらに内陸遠隔地などの不利な条件に耐えて、文字通り長い苦難の鉱山業フロンティア時代を体験した。

本格的なブーム・タウンとしての1950年代以降の Mount Isa についてここで詳述する紙面的余裕はないが、1955年には水需要の増大に対応して、新しく Leichhardt Dam (後の Lake Moondarra) の建設も始まった。さらに1950年代から家族用の広い社宅やショッピング・センターなどの建設とともに、会社が従業員の持ち家 (home ownership) を援助する計画の検討も進められた。このように家族持ちの人々が多く集まり、また持ち家問題が登場してきたことは、鉱山と地域の将来性が確実視されてきた証左で、安定的なブーム・タウンへの様相を示すものであるといえよう。なお1959年には海港タウンズビルに銅製錬所が開設され、1965年には鉄道輸送の改善計画も完成した。とくにこの1965年には Black Rock Open Cut における採掘が一応完了したが、この露天掘りで335万トン余もの銅鉱石が掘り出された。この露天掘り鉱石からの粗銅 (blister copper) 高だけで、前述した Cloncurry 周辺地域の古い諸銅山すべてから⁵⁸⁾産出された粗銅高より多かったといわれる。

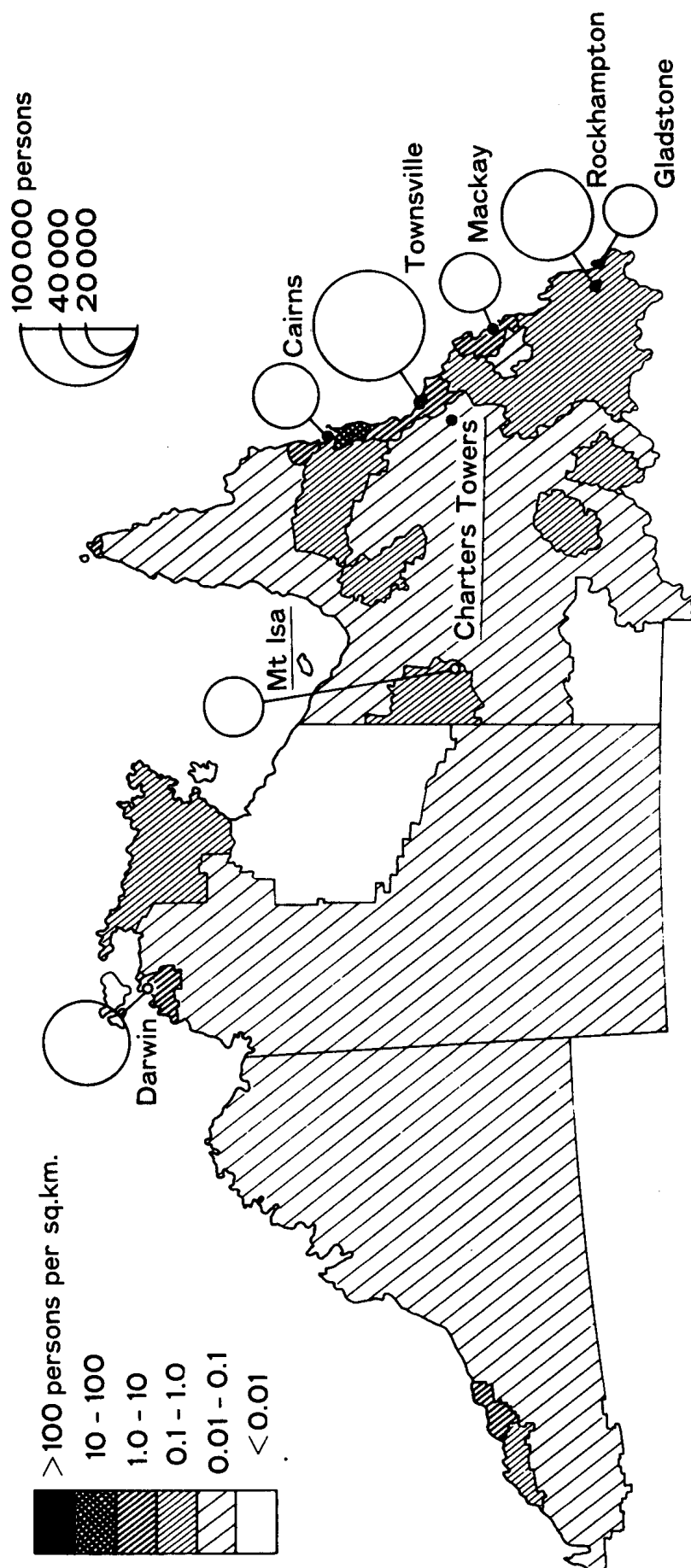
かくして Mount Isa は1950年から60年代に至り本格的なブーム・タウンの様相を呈してきたが、また同時に Qld 北西部の地域中心地としての機能的性格をも強めるに至った。Mount Isa は行政的には Shire of Cloncurry に属してきたが、1962年から独立して Mount Isa 自体で shire council をもつ1つのタウンになった。これは Mount Isa のコミュニティが1つの shire としての役割を演ずるまでに成長したことを州政府が認めたからであった。さらに1968年には shire council に代わって city council を有する1つのシティとして正式に承認

され市長が統轄するところとなった。ところどころかかる Mount Isa は、また鉄道終端地として、北西の Barkly Tableland 方面などの牛牧場地域を背後地としたビジネス・センターともなった。さらに Cloncurry が遠隔地方の拠点として有してきたコミュニケーション・センターとしての機能が Mount Isa に移ってきた。例えば民間航空局が Mount Isa に移り、飛行医療サービスの R.F.D.S. 基地も1965年に Mount Isa に開設されるに至った（写真4）。当然、その R.F.D.S. のトランシーバーを教育目的に利用した、いわゆるラジオ通信教育の‘School of the Air’も設けられ、遠隔地の子供の教育に寄与することとなったが、Qld で最初にこれを開いたのはいうまでもなく Cloncurry であった。⁵⁹⁾

このように Cloncurry は Mount Isa の発展で遠隔地方の拠点集落としての機能は弱まったが、ゴースト・タウンにならないで1981年現在人口1,961を数える urban centre として、牧場地域の中心地としてのアイデンティティを維持している。なお Cloncurry 西方の Mary Kathleen で1958年にウラン鉱の採掘が始まり、一時はオーストラリア最初にして最大のウラン鉱山として脚光を浴びたが、この鉱山集落は1983年初の完全操業終止で建物が撤去され無人の地と化した（写真9）。これはテント・タウンからブーム・タウンへ、さらにゴースト・タウンに至る鉱山集落のライフ・サイクルをわずか24年の短期間で示した鉱山集落の好例であった。

いまや Mount Isa は州都ブリスベーンからジェット機の定期便が2時間足らずで飛び（写真3）、海岸への道路も整備された。また家畜を運ぶ road train が鉱山地周辺を疾走する（写真15）。確かに交通機関の発達により時間的距離が短縮され、遠隔地集落の孤立性は漸次克服されてきた。しかし、Mount Isa の有する孤立性、遠隔性の代価が、そこに住む人々にとって高いことは将来においても否めないであろう。G. Blainey は、世界の遠隔地に形成された大きなヨーロッパ人のコミュニティの中で Mount Isa は最も孤立したコミュニティの1つであると指摘した。⁶⁰⁾

かかる遠隔地の Mount Isa には白人を中心に50有余に及ぶ国籍の人々が互いに共存して生活を営んでおり、鉱山とは別にいかにして1つのシティとしてのアイデンティティを確立していくか興味深い。いわゆる Mount Isa 自身も複合民族多文化社会（multicultural society）を目指すのであろうか。ちなみに Mount Isa の city area は実に40,977km²にも及び、スイスやオランダの面積とほぼ同じであるが、1971年センサスの行政区人口26,502、人口密度は1km²当り0.65人である（第6図）。なお行政区人口の約96.2%が urban 人口で、文字通り人口のほとんどは鉱山地の市街地、住宅地に集まっており、無住の荒野がその



第6図 熱帯オーストラリアの地方行政区別の人口密度 (1976)
 [Courtenay, P.P.(1982), p.64]

周辺に広がっている。鉱山地はまさに荒野の中のオアシス、すなわち文明社会である。

注

- 1) 川崎 茂 (1987) : 鉱山業フロンティアの諸相。米倉二郎監修『集落地理学の展開』大明堂, 181~204.
- 2) 川崎 茂 (1988) : オーストラリアの鉱山業フロンティア—Broken Hill を中心に——。金沢大学文学部地理学報告, 4, 29~57.
- 3) 川崎 茂 (1977) : ウェスタンオーストラリアの Eastern Goldfields における鉱山集落の形成。佐賀大学教育学部研究論文集, 25(I), 143~188.
- 4) この第26回 I.G.C.のプレ-コンgress巡検 A6 (Remote Settlements in Northern and Central Australia) にアジアから参加したのは筑波大学の佐々木博教授ご夫妻と筆者だけであったが、この巡検については次のような適切な報告がすでに公刊されている。
佐々木淳子 (1989) : オーストラリア, バス旅行記——内陸の牧牛地域と鉱山都市を中心に——。地理月報 (二宮書店), 368, 7~9.
- 5) 太平洋フロンティアに関する記述は主として次の著作によった。
Young, J.M.R.(1967): *Australia's Pacific Frontier. Economic and Cultural Expansion into the Pacific:1795-1885*. Cassell Australia Ltd., Melbourne, 111p.
- 6) 川崎 茂 (1978) : サウスオーストラリアにおける初期植民と鉱山業。佐賀大学教育学部研究論文集, 26(I), 1~53.
前掲2)川崎 (1988), 33~35.
- 7) 川崎 茂 (1982) : ニュージーランド南島の植民とゴールド=ラッシュ。石田寛教授退官記念事業会編『地域—その文化と自然』福武書店, 292~306.
- 8) Cumberland, K.B.(1968): *South West Pacific. A Geography of Australia, New Zealand and Their Pacific Island Neighbourhoods*. Whitcombe and Tombs Ltd., Christchurch
[石田 寛・浅黄谷剛寛訳 (1972) : 『カンバーランド 南西太平洋 オーストラリア, ニュージーランドおよび太平洋近隣島嶼の地理』朝倉書店, p. 71]。
- 9) Young, J.M.R., *op.cit.*, 83~89.
- 10) Courtenay, P.P.(1978): *Tropical Australia*. Jeans, D.N.(ed.): *Australia : A Geography*. Routledge and Kegan Paul Ltd., London, 289~315.

Courtenay は上記著作の中で、1971年センサスの統計区に基づいて熱帯オーストラリアの範囲を示している。それによるとクインズランド州中北部の Peninsula, Cairns, North Western, Townsville, Mackay, Far Western, Central Western, Rockhampton の8統計区, ウェスタンオーストラリア州北部の North West, Pilbara, Kimberley の3統計区, それに準州的なノーザンテリトリー全域を含めた地域を熱帯オーストラリアの範囲としている。したがって南回帰線の通る統計区, すなわちクインズランド州中央部の Central Western と Rockhampton の両統計区, ウェスタンオーストラリア州の North

West 統計区の場合は、ノーザンテリトリー同様、南回帰線の南の部分をも熱帯オーストラリアに含める結果となった。

- 11) Courtenay, P.P.(1982): *Northern Australia. Patterns and Problems of Tropical Development in an Advanced Country*. Longman Cheshire Pty.Ltd., Melbourne, 2 ~ 20.
- 12) 以下各地の1981年現在の人口数をはじめ、距離数字、その他簡単な地域紹介的な記述は、主として次によった。
 Shaw, J. (ed.)(1984): *Collins Australian Encyclopedia*. William Collins Pty.Ltd., Sydney, 848p.
- 13) Jones, T.G.(1987): *Pegging the Northern Territory. The History of Mining in the Northern Territory of Australia, 1873-1946*. Northern Territory Government Printer, Darwin. 1~17.
- 14) Hardman, W.(ed.)(1865): *The Journals of John McDouall Stuart*. Saunders, Otley and Co., London. (Facsimile edition, 1984: *Explorations in Australia, John McDouall Stuart*. Hesperian Press, Victoria Park, 511p.)
- 15) Dickinson, J.(1988): *Litchfield's Gold. The Life of Fred Litchfield*. Janet Dickinson, Darwin, 93p.
- 16) Jones, T.G., *op.cit.*, 45~69.
 Terrill, R.(1987): *The Australians*. Simon and Schuster, New York, 200~202.
- 17) Jones, T.G., *op.cit.*, 71~98.
- 18) *Ibid.*, 72~73.
- 19) Courtenay, P.P.(1982), *op.cit.*, p.15.
- 20) Jones, T.G., *op.cit.*, p.138.
- 21) 22) 23) 前掲3)川崎 (1977), 153~160.
- 24) 前掲10)のCourtenayによれば、彼が示した範囲の熱帯オーストラリアの面積は実に大陸の約48%をも占めるが、しかし人口は1971年センサスによればわずか5%程度である。これに対し、大陸南東部のいわゆる‘ブーメラン・コースト’の地域は、大陸の10%にも満たない面積であるのに人口は実に80%余にも及ぶ高い人口密度を示している。なお、‘ブーメラン・コースト’とは、アデレード付近からメルボルン、シドニー、ブリスベン付近に至る海岸ならびにその奥行き200マイルに及ぶブーメランの形をなす地域を俗に称する。
- 25) 前掲2)川崎 (1988), 前掲3)川崎 (1977)。
- 26) 熱帯オーストラリアの鉄道と鉱山・集落関係については主として次の著作などによった。
 Courtenay, P.P.(1978), *op.cit.*, 300~303, 310~315.
 Courtenay, P.P.(1982), *op.cit.*, 12~20.
- 27) The Historical and Literary Sub-Committee of the Cloncurry Centenary Celebrations Committee(ed.): *Cloncurry 100 1867-1967*. (printed by Carpentaria Newspapers Pty. Ltd., Mount Isa), 11~13.
- 28) Altman, J.C.(1983): *Aborigines and Mining Royalties in the Northern Territory*.

- Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra. 16~23.
- 29) Tennant Creek 付近の記述については主として次の著作によった。
Jones, T.G.(1987), *op.cit.*, 198~202.
- 30) Blainey, G.(1969): *The Rush That Never Ended. A History of Australian Mining.* Melbourne Univ.Press, Carlton, Vic., 320~321.
- 31) Jones, T.G.(1987), *op.cit.*, p.138.
- 32) The Historical and Literary Sub-Committee of the Cloncurry Centenary Celebrations Committee(ed.), *op.cit.*, p.4.
- 33) Blainey, G.(1960): *Mines in the Spinifex.* Angus & Robertson Publishers, North Ryde, N.S.W., 5~6.
- 34) *Ibid.*, 11~17.
- 35) The Historical and Literary Sub-Committee of the Cloncurry Centenary Celebrations Committee(ed.), *op.cit.*, 6~7.
- 36) *Ibid.*, p.34.
- 37) *Ibid.*, 19~25.
- 38) 39) *Ibid.*, p.4.
- 40) 41) 42) *Ibid.*, 7~9.
- 43) 44) *Ibid.*, 26~32.
- 45) 46) *Ibid.*, 14~17.
- 47) 48) Hopper, J.R.(ed.): *Mount Isa : Golden Jubilee 1923-1973.* M.I.M.Holdings Ltd. (Printed by James Ferguson Pty.Ltd., Brisbane), 9~11.
- 49) Blainey, G.(1960), *op.cit.*, 120~138. Blainey, G.(1969), *op.cit.*, 327~330.
- 50) 51) Hopper, J.R.(ed.)(1973), *op.cit.*, 13~15.
- 52) *Ibid.*, p.21.
- 53) Blainey, G.(1960), *op.cit.*, 139~148.
- 54) 55) Hopper, J.R.(ed.)(1973), *op.cit.*, 19~30.
- 56) 1988年の I.G.C. Pre-Congress Excursion (A6) の現地配布資料 (M.I.M. 1986/87 Basic Facts)。
- 57) 前掲 1) 川崎 (1987), p.186.
- 58) 59) Hopper, J.R.(ed.)(1973), *op.cit.*, 26~34.
- 60) Blainey, G.(1960), *op.cit.*, p.228.



写真1. 機上からの Mount Isa の中心部とその周辺 (1988年8月川崎撮影)



写真 2. Mount Isa の中心街 Marian Street と鉱山。
この Street の突き当たり Leichhardt River 対岸
に R.F.D.S. 基地, 鉄道駅。右に高さ 270 m の鉛製
錬所大煙突 (1988 年 8 月川崎撮影)

写真3. Mount Isa 空港でブリ
スベーンからの Aus-
tralian Airlines のジェ
ット機から降りる人た
ち (1988年 8 月川崎撮
影)



写真4. Royal Flying Doctor
Service, Mount Isa
Base (1988年 8 月川崎
撮影)



写真5. Mount Isa の中心街
(city) 東方の The Gap
付近の住宅 (1988年 8 月
川崎撮影)

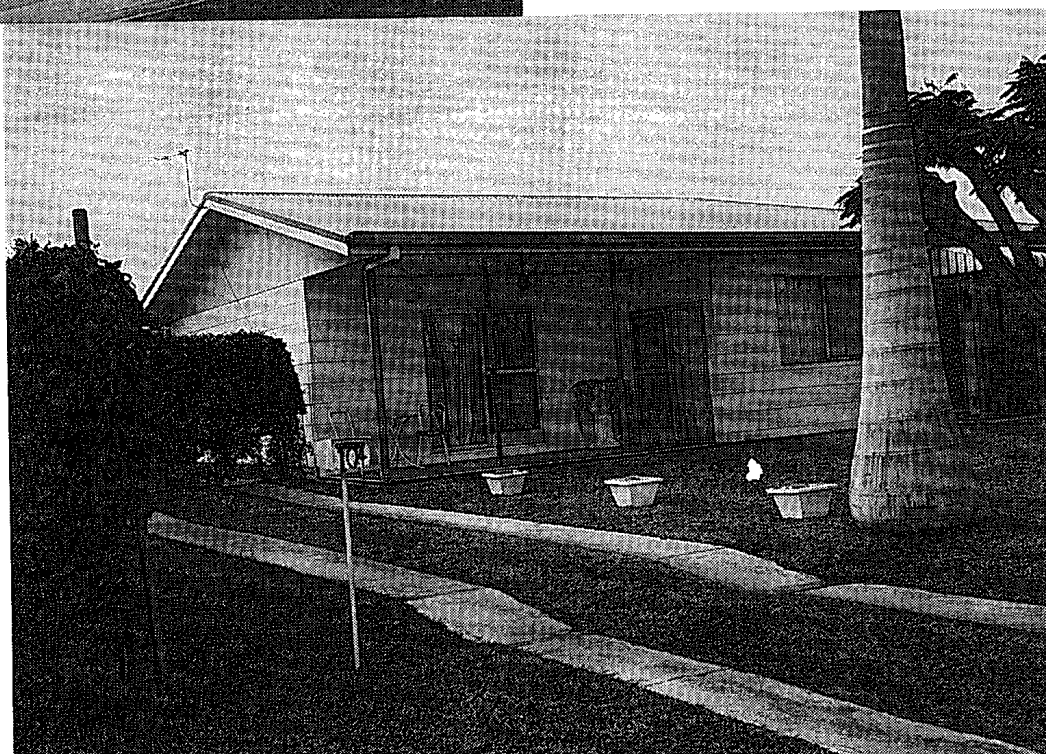




写真 6. 19世紀後半に形成された遠隔地集落 Cloncurry を望む (1988年 8 月川崎撮影)

写真7. Cloncurry の1932年 建造の Post Office Hotel
(1988年8月川崎撮影)



写真8. Cloncurry の図書館前
の Royal Flying Doc-
tor Service 記念碑
(1988年8月川崎撮影)

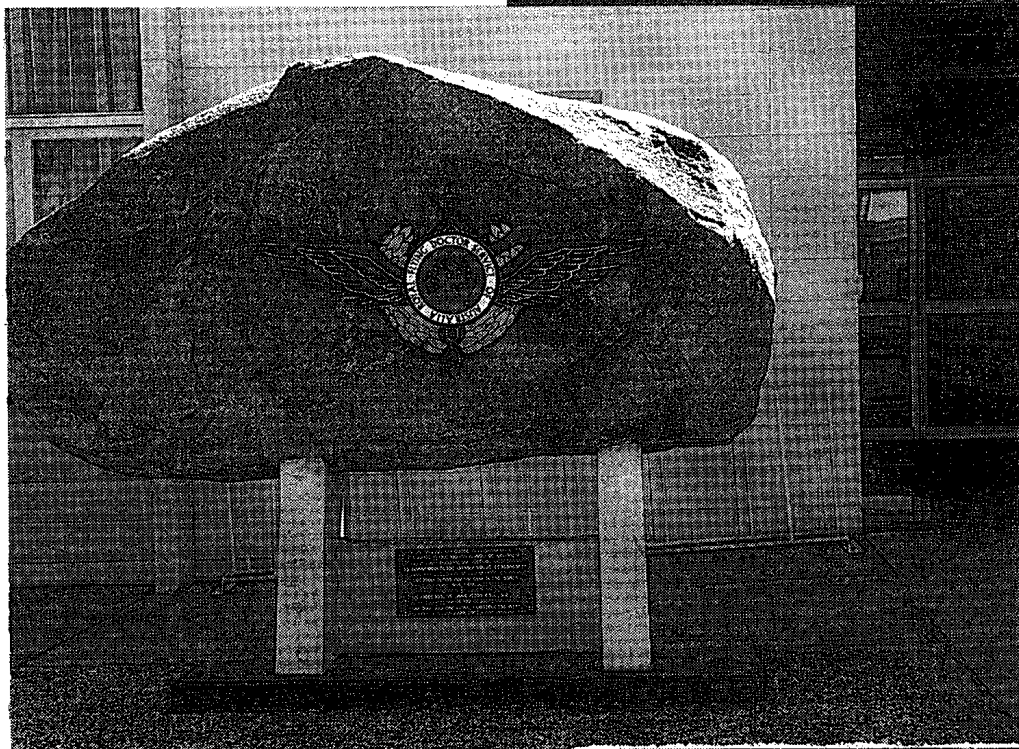


写真9. Cloncurry 西方, ウラ
ン鉱山町 Mary Kath-
leen の集落跡地 (1988
年8月川崎撮影)



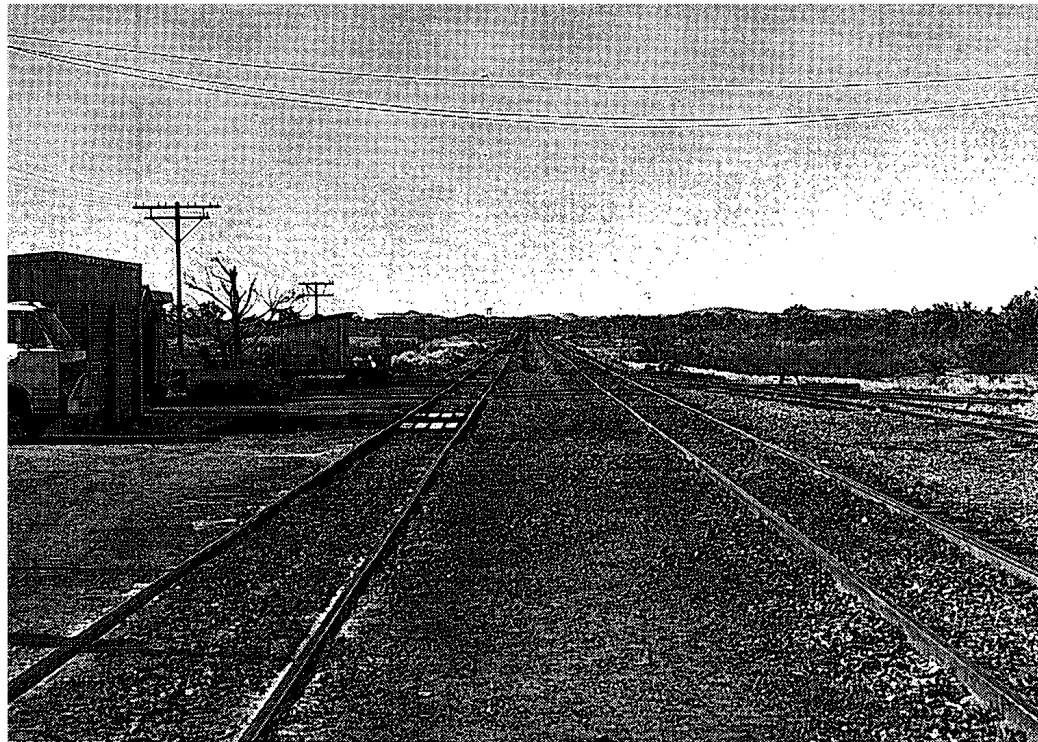


写真10. Duchess 駅付近の景観。
Cloncurry を経て海港
タウンズビルに通ずる
鉄道(1988年 8 月川崎撮
影)

写真11. Mount Isa と Dajarra
の両鉄道終端駅に向か
う分岐駅 Duchess (1988
年 8 月川崎撮影)



写真12. 牛輸送などの鉄道終端
駅 Dajarra 小集落の子
供たち(1988年 8 月川崎
撮影)

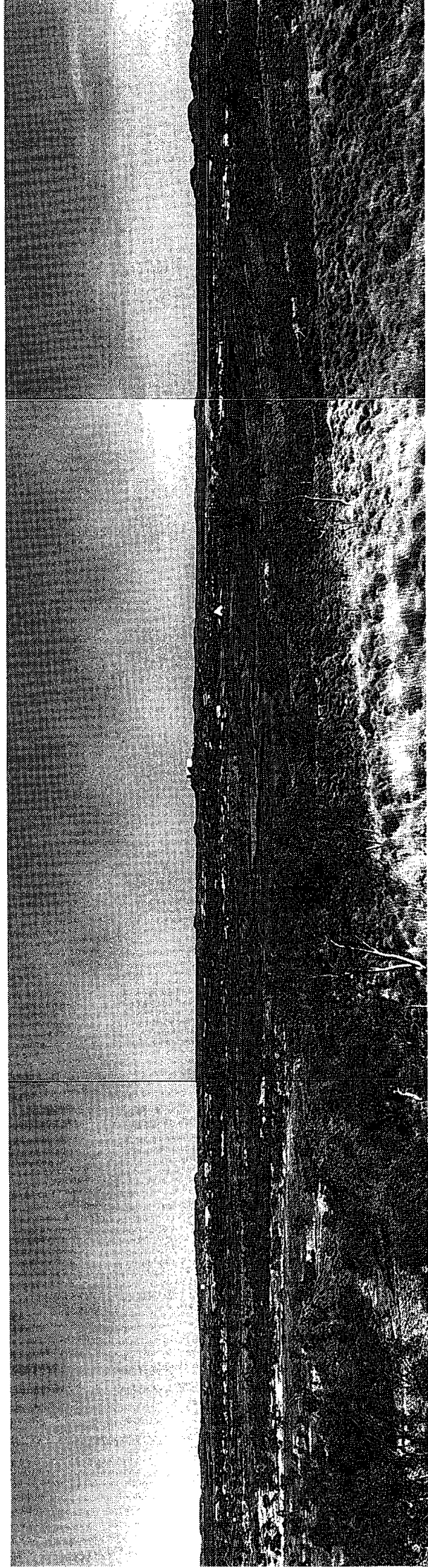


写真13. 1930年代以降に形成された遠隔地集落 Tennant Creek を望む。中央部の丘の上に貯水タンク (1988年8月川崎撮影)

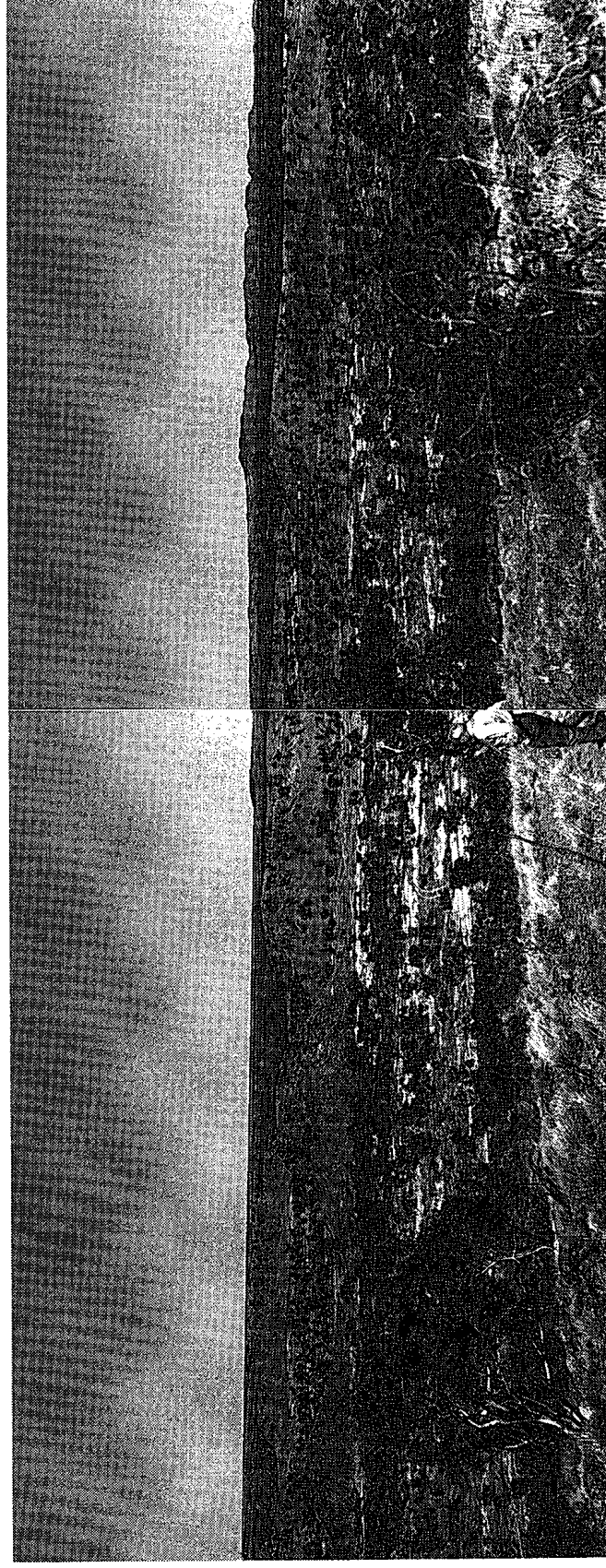


写真14. Tennant Creek 東方, ブッシュの中の Peko 鉱山地方面を望む (1988年8月川崎撮影)

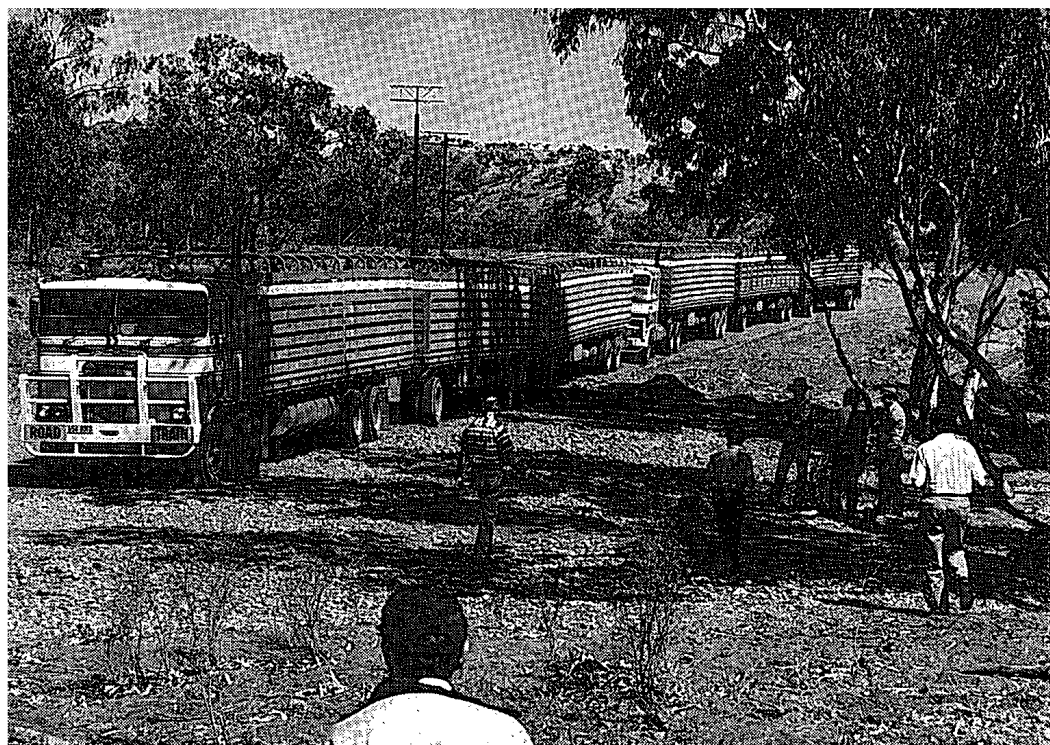


写真15. 牛を運ぶ Mount Isa 運
送会社の road train。
Cloncurry の近くにて
(1988年 8 月川崎撮影)

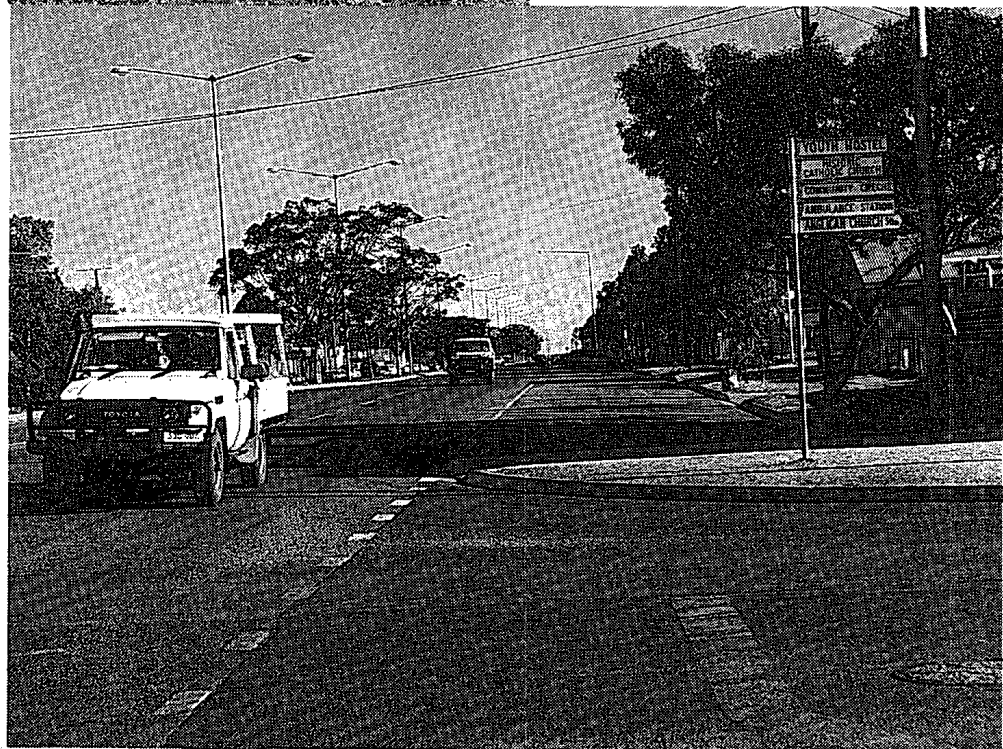


写真16. Stuart Highway 沿い
の Tennant Creek 市街。
TOYOTA の車が走る
(1988年 8 月川崎撮影)



写真17. Tennant Creek 郊外の
spinifex country (1988
年 8 月川崎撮影)